東方操魂道

サネキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方操魂道

【Ｎコード】
Ｎ１０１４Ｚ

【作者名】
サネキ

【あらすじ】
目が覚めたら眼の前に人の顔があった。そしたら、なかなかヤバイ能力を持っているとわかった。人でなくなったと気づいた。泣いた。そんな化物が日本をあっちへふらふらこっちへふらふら。それから幻想郷で暮らす物語
追記：１２／２０より大きく改稿しております。話の流れはそれほど変わってはいませんが

真っ黒、誕生（前書き）

物書き初心者がやっちゃった作品

駄文ですがよろしくどうぞ

真っ黒、誕生

深い森の中、人が倒れていた。否、死んでいた。その人のそばに何とも言えない黒いものがいた。よく見れば人の形をしているとわかる程度。その人のようなものはただ呆然と死んだ人間のそばに立っているだけである。何もしようとしない。

「……何だよ、これ？俺はどうなった、死んだのか？」

ようやく、黒いのは動き始めた。顔を触り、体を触り、自分がどうなっているのか確かめている。次に、もう動きはしない人を掴み、顔を見た。

「これは、俺、――っ！」

急に蹲り、のたうち回り、喚きはじめた。それは声が枯れるほどの声量。我慢することなど到底不可能だと言わんばかりである、とわからせるほどの有様。

自分が人でなくなったと、わかってしまったのだろう。人ではなくなったという恐怖。頭の中に流れてくる化物の情報。そして、黒いのにしか聞こえない中にいるもの達の声。

黒き化物は、世が世なら死神と呼ばれてもおかしくない存在であった。そして、この死神は魂を喰らうのである。喰らった魂はどこに行くこともなくだた死神の中に在り続けているのだ。今、主導権を持っているのは人であったもの。人であったものが、死者の声を聞いて耐えることなどできはしない。精神が壊れていくだけだ。とうとう、化物は動かなくなった。

＊

それだけの月日が経ったか、それは耐え切った。しかし、耐えきらずそのまま壊れたほうが良かったであろう。かつて周り森であった。だが、今は地面はむき出しとなり、鬱蒼としていた木々はなくなっている。これは、死神が自分を生かそうとした結果だ。死神は生きているものであれば、喰えないものはない。そして、再び、死者の声が中で喚き始める

今度は倒れなかった。来るとわかっていたからであろう。それは、少しずつ歩き始めた。どこか安息の地をめざして。これの性質をわかった上で歩いている。歩いた所にあった草が枯れ、中に入ってくるが、気にしない。もはや、自分を保てているのが奇跡というほかない。

黒いのは立ち止まり、気づいた。何も無い所であれば、吸収はできないと。黒いのは中で喚いてるものに向かって、

「うまくいったら、お前らもここから出られる。少し待ってくれ、きっと」

言い聞かせるように呟く。それを理解したのか、中にいるものは少しだけ喚くのを止めた。少しだけだったが、化物は楽になった気がした。少しだけ許された気がした。

黒いのはようやく最初に倒れたところに着いた。

「さよなら……」

そう、呟いて、眠っていった。

＊

主導権を奪われた存在はまだ、かろうじて中に生きていた。それは、古くから生きていた存在であったが、人間を喰らったことはあまりなかった。それにとって人間は極上の食べ物であると同時に毒であった。人間はあまりにも他の生き物と比べて情報量が多かったのだ。

そして今回食べた人間はこの時代を生きている人間ではなかった。この時代よりはるか未来の人間であり、その人間の情報量はこの時代の人間の何十倍、何百倍といっていいほどの量だった。その量に耐え切れず、思わず主導権を渡してしまったのだ。

その化物だったものは死にたくなかった。なのに動かしているものは死のうと眠っている。そこで、気づいてしまった、死とはこんなにも恐ろしいものだと。しかし自分はどうなろうと消えて行くだろうと、そこで腹が立ってきた。動かしている奴は死にたいと思っている。だったら死なせてやるものか、その思いが新たな能力を生んだ。

“魂を操る程度の能力”

この化物は常に違う魂を自らのものにしなければ生きていけない存在であった。ちなみに中にいるのはまだ消化できていないもの達

である。自分の魂を操れるのなら別だ。そう思ったのであろう。今、動かしている奴を死なせたくない一心で生み出した能力。それに満足しながら、化物であったものは消えていった。それが、奴が苦しみから解き放たれる。ということに気付かないまま。

目を覚ました。落胆のため息と共に。しかし、気づいた。自分の中に違う能力があるということを。中にいるもの達が今か今かと待っていることを。そして、理解した。魂を自由自在に操れることを。もっとも、いろいろと制約があるようなのだが。

早速、能力を発動した。中に溜まっている魂を解放するために。光が体から徐々に漏れてくる。その光は何千とまではいかないようだが、それなりの数があった。体が徐々に軽くなっていく。そう黒いのは感じた。解き放たれた光が周りに集まってくる。まるで感謝しているかのように。そのことになぜか涙が流れた。実際は流れてなどいないのだが、そう感じた。

全ての魂が体から抜けきって、安堵したからか、化物はふらふらとし始め、再び、眠りについた。光はまだ化物の周りに集まっていたが、ただ寝ているだと、わかったからか、天に昇っていった。

＊

「起こしてしまったようだな、すまない」

「いや、気にすることはないさ。お前の足音はでかいからな。どうやったって起きちまうもんさ」

黒き化物はそう軽口を叩きながら体を起こす、寝起き特有のぼーとした感じはなく覚醒しきっているようだ。そこに、かつての憔悴しきった感じはなく実に晴れ晴れとしている。対する声をかけてきた方はただ大きいとしか言えないほどの立派な牙を持った猪でだった。もっとも、その猪の体毛は幼少期のそれであり、縞模様が走っている。

「夢を見ていた。俺がこの化物になった時のだ」

「ほう、お主が寝ることも珍しいというのに、夢まで見るとは」

「いや、俺はよく寝るぜ。ま、体を小さくしてる時だから気付かないのかも知れないが」

「そうであるか。確かにお主が身を小さくしたのなら気付かぬであろうな」

現在黒き化物が、魂を解放してから長い時が経っている。黒いのが最初にやってことは自分の姿を確認することだった。手足や胴体はわかるが、顔はどうやったって見ることはできない。幸いにも枯れ切っていない森の中に湖があった。そこで顔を見ていると何もなかった。いや、うっすらと口のようなものがあるだけであった。身長は小さかった。１５０ｃｍあるかないかであった。これには肩を落としている。思わず

「ありえねえ、１８０はあったというのにこんなちびになるとか。化物になっちまったものはもう受け入れざるを得ないけど、こんな身長は嫌だ！」

そう言った、瞬間、化物の身長が伸びた。おそらく１８０ｃｍあ

るだろう。急に視界が変わって驚いているようだが、なにやら理解したようで、

「この体は魂だけなんだ……肉体はなく、魂だけなんだ、だから俺は自由に操れる。もうちょっと伸ばせれるかな」

そう言いながら自分の身長を伸ばしたり縮めたりして、遊んでいる。まるで新しい玩具を与えられた子どものように。

「さてと、新たな生を充実させるために行動開始だ！」

そう言って、森の中に入っていった。

黒いのは今いる山を支配しようとかいろいろ企んだりしたのだが結局は今、前にいる巨大に猪に吹き飛ばされ失敗している。そろそろ閑話休題して話を戻そう。

「それにしても、お前と会ってから随分と経ったな」

「そうであるな、確かお主がここに来たのは山を支配しようとかそんな理由であったな」

「過去をほじくり返すなよ」

「お主から振った話題であろうに」

「あん時はまだ若くて、調子乗ってたんだよ。つーか横からぶっ飛ばすなんて反則だ」

反則も何もこの猪が獲物を追っているときにたまたま横切った黒

いのにぶつかっただけである。そもそも巨大な猪の走る音に気付かないほうが悪いのだ。黒いの曰く考え事していて気付かなかった。だ、そうなのだが。その後、この猪が支配している山の一員として受け入れられていった。

「その後に、しっかりと勝負したではないか。尤も勝負になんぞならんかったがな」

そう言って、巨体を揺らし笑う。その笑いは単純に馬鹿にしているのではなく、古くからの友人だからこそできる笑いだった。とはいえ馬鹿にされたことには変わりなく、

「ふざけんな、お前のその巨体を堂々と真正面から受けてやった俺の度胸を褒めろ。回りこんで攻撃しなかったんだしよ」

「ほっほ、お主程度の臂力で吾を倒そうなどとは笑止」

「潰す！今度こそ絶対に潰す。おら！来いや！うり坊が！」

言った瞬間、黒いのは空高く投げ飛ばされた。成体の猪の二回りはある猪の本気の掬い上げである。どこまで飛んだのか、落ちてくるのにやけに時間がかかった。

＊

「卑怯だ。いきなりぶっ飛ばすなんて卑怯だ」

そんなことを倒れながら呟いていると後ろのほうからのっしのっ

しとあの猪が歩いていきた。

「ほっほ、これで何度目の吾の勝ちであろうな。すくなくとも負けはないとわかっておるのだがな」

「ざけんな、いずれお前に膝をつかせてやる。この大人になれない猪が」

そう言われた猪は徐ろに前足を上げ、黒いのの上で下ろした。もちろん、黒いのにその重みは耐え切れず地面ごと踏み潰された。

「吾が気にしていることを話すお主が悪い」

踏み潰しただけでは飽き足らず、足を器用にグリグリと動かしている。その度、下から奇妙な呻き声がする。

ようやく満足したのか、猪は足を上げた。尤も黒いのは立ち上がってこようとしないのだが。少し経ち、黒いのが顔を上げると、

「……この山を出る。出て修行して、お前を倒せるようになってやる！」

「ほっ、この山を出るとな。確かにお主は死が遠い存在であるが危険なことには変わらんぞ」

「危険も承知。でなければ、お前を倒すことなんて無理だ」

「お主の能力を使えば吾なんか簡単に倒せるだろうに」

「……それは倒すじゃねえ、殺しだ」

黒いのには確かに魂を吸収しなくても大丈夫になった能力がある。だが、化物としての能力は消えていないのだ。これさえ使えば、どんな生物とて触れさえすれば殺せる。相手の格が自分より遥か上でなければ。尤もそのことはまだ、知らないのだが。

「俺は俺を慕ってくれて尚且つ俺の糧になりたいと言うやつしか吸収は絶対にしない。もちろん、どんな勝負でもだ。これについては絶対に曲げない」

「そうであったな、すまん」

黒いのにとって死とは自分の魂が枯れることである。しかし、現在はその魂を操れるのであるから枯れることなんて自分がしない限りあり得ないのだ。つまり、黒いのにとってほとんどの生き物と別れが存在するのだ。例外は目の前の猪のように通常の生き物の枠を飛び出たものだけ。

そして、特に親しくなりどのような存在であるか知ったものがよく黒いのに吸収を求めたのだ。そのようなもの達は黒いのの中に在り続ける。吸収した魂が自分の物になる。つまり全てを自分の物にする、記憶も感情も全てだ。故に黒いのはその吸収を滅多に使わない。使いたくない。

「達者でやれよ。お主にとっては杞憂だと思うが」

「おう、そっちこそ。くだらん相手にやられんじゃないぞ」

「ほっほ、そうじゃな。吾が死んだ時はお主に吸収されたいと思っておるでな」

「莫迦野郎。そういう事は思っていても言うんじゃねえ」

黒いのはそう言って、そっぽをむいた。今生の別れでなくても別れは別れだ。それは悲しいものである。

黒いのと猪の会話はそれ以上はなく、そのまま黒いのは山を降りていった。黒いのは離れた後にちいさな声で、

「ありがとう。友達になってくてれ……」

そう言ったのであった。

真っ黒、神を知るその1

「森の中を。目的地も決めずただふらふらと。真っ黒な人がふらふらと。歩くー」

あの山を出てからそれなりの月日が経っている。黒いのは東や西、北や南へと各地いろいろなところへ行った。一番滞在時間が短いのは北であった。単純に寒かったのだ。黒いのは肉体がない。しかし、魂が寒いと感じてしまえば、そこは寒いのである。故に元は人間であったせいか雪の降る地域などでは、体が震える程度ではすまないくらいに寒さを感じてしまっていたのだ。しかも、服を着ていない。と思っているのでなおさらだろう。

服を作らない理由は単純、能力の更なる使い方がわかったからであった。それは変化と言ったところか。一度吸収した魂の情報を元にその動物の形になれたのだ。おそらく植物にまでなれるのだろう。しかし、一部分だけ変化することはできないようで、人でなくなったときに発する言葉はその動物の物となっている。おそらく、能力が成長したら部分だけ変化も可能になるのだろうけど、今の段階では無理なようだ。

道中はどうしても危険な目にはあう。変化すると形だけが変わるのでなく、本質そのものが変わっているようで同種のものには怪しまれない。しかし、その天敵にはひたすら攻撃されるのだ。そういう時は違うの形になればいいと思うのだろうが、そもそも攻撃して興奮してる奴が、いきなり相手が変わったからといって攻撃を止めるはずもなく、そのまま、攻撃をするやつのが多い。匂いが激烈に変われば別なのだろうが、どうも、黒いのは無臭のようだ。

攻撃してもいいのだろうが、黒いのは化物だ。あの猪がおかしいだけで、その力は強い。そして、下手に殺ってしまうと魂が中に入ってきてしまう。これも成長したら違ってくるのだろうが、今は、まだ無理なようだ。

黒いのの信条として、吸収していいのは自分のことをどのような存在か理解して友となったやつだけなのである。もちろん、思わぬことで殺ってしまったことはあるのだが、すぐに解放させている。しかし、それでもある程度は情報が入ってしまうし、そこで解放するまでに喚かれるのは鬱陶しい。更に自分のことを怖がっているなどという情報はいらない。

「ふう、今どのへんだ?。しかし、こう森の中だと位置がさっぱりだな。人間から変えようかな」

黒いのはそう言い、狼へと変わった――もっとも、その姿を狼と捉えれる人は少ないだろう、なにしろ真っ黒だ――その狼は修業の途中であったもので一等大きかった狼であり、友となった。変われるということは吸収したのだが、そこは相手の同意の上でやったのだ。勿論、悲しくあったのだろうが、その狼の寿命がもうすぐであったことが吸収した大きな理由だろう。

視点が一気に低くなり、足取りは少しぎこちない。まだ、四足歩行に慣れていないようだ。しかし、森の中だと四足歩行の方が進む速さが違う。もっとも空飛んだほうが速いのだろうが、黒いのは修行と言いつつ、旅行とも考えているようだ。つまり、人間だった頃にはなかった大自然を満喫しながら進んでいるのだ。

＊

辺りの空気が変わった。所謂、神域と呼ばれる領域に入ったのである。

「これはまずいな。でも、遠回りな……突っ切るか」

そう言って狼の形で全力で駆けていく。神によっては動物より縄張り意識が強いやつがいる。そして、神々にとって相手が如何なる存在であっても、滅ぼしにかかってくる。神にとって黒色は穢れも同然なのだろう。穢れも同然のやつが、自らの領域を進んでいるのだ。

「とう！……つっかまえた！」

突然、黒いのの上に何かが飛び乗ってきた。よく感じればその体から神力が発しており、神だとわかるのだが、今の黒いのに神力だとかを見分ける眼は持っていない。

「ウォン！（くそっ！遅かったか！）」

「あれ、喋んないね、こいつが今噂の真っ黒妖怪じゃないのかい？喋んないのかい。喋らないと私がつまんないだろ」

飛び乗った神が黒いのの首を抱えるようにして、絞める。首を絞められて喋れるわけがないだろうに。まるでロデオのように暴れるが神は平然と乗り続けている。

「おい、さっさと何か喋れよ、つまんないじゃん」

更に絞め上げてくる。これには、耐え切れなくなってきたのか、それとも、ただ単純に腹が立ったのか吸収しようと能力を発動させてしまった。

「うん？――っと、まずい！」

神は自らの力が急速に減っていくのを感じ、黒いのから飛び降りて、ぶん投げた――小さくても神である。大きさなんてあってもないような物だ――そして、嫌な角度で木にぶつかった。

黒いのは、

（今日は厄日だ、ちくしょう）

そう思わずにいられなかった。勿論、神域を突っ切って抜けようなどと甘い考えを実行した黒いのが悪いのだが。

＊

「暇だねー、神奈子は寝てるし、参拝客は来ないときたもんだ」

守矢神社の祭神の一柱――もっとも、現在祭事などには一切出ていないのだが――洩矢諏訪子は暇であった。もう一柱の相方的存在である、八坂神奈子は連日の酒がとうとう回ったのかぐっすりと眠り込んでいた。故に暇だった。そんなときに自らの領地である森の中で感じ慣れないもの感じ取ったのだ。そして、その正体を見極めるため、暇を潰すため直ちにそちらの方へ向かったのであった。

（なんだいありゃ？あれから妖気を感じるってことは妖怪なんだろうけどこのあたりにあんなのはいなかったしね。新種かな？いや、そういえば昨年の出雲へ行ってた神奈子が面白い妖怪があちこち周ってるって神々のなかで噂になってるって言ってたね。確か、全身が真っ黒で、あと喋る……うーん、あれかな？まあ、なんだっていいさ、私の暇つぶし相手になってくれればね）

そんなことを考えながら木々を飛び移っていく。へんてこな帽子を飛ばさないように器用に。そして黒いのの進行上に待ち構えると、

「とう！……つっかまえた！」

どんぴしゃである。これにはしてやったりとした顔を浮かべていたのだが、

「あれ、喋んないね、こいつが今噂の真っ黒妖怪じゃないのかい？喋んないのかい。喋らないと私がつまんないだろ」

自分が思っていたのと違っていたのかと思い、少々いらつき始めている。

「おい、さっさと何か喋れよ、つまんないじゃん」

自分が首を絞めていることに気づいていないのか、振り飛ばされないように更に力を込めていた。勿論、それは悪影響を及ぼすのだが。

「うん？――っと、まずい！」

違和感を覚えたからか、ひょいと飛び降り、諏訪子は黒いのを思

わず投げ飛ばしてしまっていた。

木に当たった衝撃音が辺りに響く。諏訪子はその木に、やっちまったなという感じに頬を掻きながら近づいていった。

「ありゃ、気失ってじゃん。情けないね。こいつ、どうしようか……さっきの抜ける感じといい、興味が湧いてきたな」

黒いののそばに立ち、諏訪子はどう持ち帰ろうか悩んでいた。何しろ、黒いのの体は諏訪子の倍以上あるのだ。投げ飛ばしたことからわかるように持てないことはない。しかし、それを持ち上げたとしても引きずってしまうのだ。空を飛べばいいと思うが、それでも鬱陶しいことには変わりないのだろう。

（やっぱり、このまま放置しておこうかな）

何て考え始めた時、黒いのの体が途端に人間の形を取り始め、その上どんどんと縮んでいったのだ。おそらく５０ｃｍも無いほどに。

その事に諏訪子はぼっとしたが、すぐに面白そうに口角をあげ、実に興味深そうに黒いのを見始めた

「ふふふ、やっぱ面白いな。天津や国津の連中は何でこんな奴を放っておいたんだ。見た目だけに囚われるから、大事なことを見逃すんだ。しかし、神奈子にはどう説明するかね」

そういうと、とても小さくなった黒いのの首の辺りを掴んで歩いていった。鼻歌を歌いながら。

＊

首を掴まれて、持ち運びされている揺れで、ようやく、黒いのは眼を覚ました。

「おや、目が覚めたのかい？」

諏訪子はその事にすぐ気が付き、声をかけた。この声色はどちらかと言えばめんどそうな感じで、そのまま、神社までもってくれればよかったのに。と言わんばかりであった。もっとも、黒いのはそんなことに気付かず、

「こ、この、はなしやがれ……おまえちっちぇーなー」

黒いのの能力がまだ成長しきってないからか、変化するとそのものに性質に近づいてしまうのだ、今、黒いのは小さくなっている。５０ｃｍもない人間は喋らないとかそういうのは抜きで、黒いのの精神は幼くなっている。黒いのの本来のものはしっかりとその事を自覚しているようなので、後で悶えることになるのだ。一度あの猪の前でなってしまい、ずっとからかわれたことがあっただけに、小さくなることだけは絶対にならないようにしていたのだが。

「誰が小さいだ！私だってな、好き好んでこんな体になっているわけじゃないんだ。あの信者だった奴らが」

「ふーん、おれはな、かんたんにおっきくなれるんだぞ。はなせ、みせてやる！」

必死にもがいて脱出し、黒いのは身長を伸ばした。

「ふう、すまない。今のは俺が悪かった」

「ははは、やっぱあんた面白いな、大きさで変わるのか。いや、大きさと言うより、形で変わるのか。道理で最初の時は喋れなかったわけだ。あんた、自分がどんな存在かわかっているのかい」

「どんなって言われても、俺、あー私にもわかりません。気づいたらこのようになっていたもので」

「別にそう畏まらなくてもいいよ、あんたは妖怪だろ。それに私はミシャグジ、無理に信仰させる気はないよ。天津や国津の一部の連中のようにはね。まったく、あいつらときたら、信仰ってのは自然と湧いてくるものであるべきだろ」

とは言っているものの、彼女らへの信仰は基本的に恐れからくるものであったので、とある天津神が、それは神の在り方として違うのでは無いか、ああ、だから、少しでも怖くないようにその体型なのか、と言ったことがあった。その時は宴会であったので、諏訪子も笑って流していたのだが、後日、その神は謎の祟りによって体を侵され数年も外に出ることができないほどであった。その事からか、わからないが諏訪子は毎年出雲へ来なくても良いというお達しがあった。

「ところで、今どこ向かってるんですか？」

「うん？ああ、そうだね私の社さ」

「中に入っていいのか？妖怪なんかが」

「何、私が神だ。私が許す。もっとも、もう一柱いるんだがね。ま、大丈夫だろう、面白いやつだし……それにもう着いた」

鳥居をくぐると空気が先ほどまでと桁違いに重くなった。力の弱い妖怪だといるだけで潰されてしまうのではないとか思えるほどである。しかも、少し先にある重厚感あふれるあの造り。こんな所に祀られているということはさぞかし位の高い神はずだと感じさせるほどだ。

「これは、また立派な」

「そうかい。まあ、普段は奥の本宮にいるんだが、昨日はここで皆と飲み会やってね。ついてきてくれ、相方がまだ寝てるんだ。今から起こす」

そう言いながら奥へと進んでいく。そして部屋の一つに入って襖を閉めた。ここで待てと言うことだろう。

中も外と劣らない造りになっている。この時代の庶民の家と比べると天と地ほどの差と言えるほどに。飛鳥時代に法隆寺ができたと考えれば、おかしくはないだろうが、あれは大量に人間が動いた結果である。都から離れたこの地域に黒いのが人間であった頃と遜色無いほどの神社が建っていることは疑問に思わざるをえない。全く以て、これがその時代まで残っていたら凄まじい価値を持つことになるだろうに。

「おい、神奈子起きろ！」

「もうちょっと寝させてー」

「客が来た。そんなだらしない格好でどうする。乱れすぎだろ。さっさと整えてこい」

「……え？客？うそ、そんな予定あったか。ちょって持ってもらえ、すぐ着替えてくる」

非常に情けないやり取りが聞こえる。この立派な重厚感あふれる造りを忘れさすほどの親しみやすそうな声であった。

「入ってきていいぞ」

呼ばれたので襖を開け中に入る。部屋の奥の一段高くなったところに背中に大きな注連縄を背負うふくよかな――主に胸が――女性がいた。しかし、その女性から放たれる神気は尋常ではなく少しでも機嫌を損ねたら一瞬で消し飛ばされると感じさせる。だが、黒いのは先ほどのやり取りでいまいちその気になっていない。ちらりと諏訪子の方を見ると付き合ってくれという表情をしている。黒いのはこれも経験だと思い。この雰囲気を保つことにした

佇まいを正し、声をかけられるのを待つこと数秒。

「よく来た……妖怪。しかし如何なる理由をもってこの地に足を踏み入れた。その理由次第では」

「――っははは！いやー神奈子やっぱあんた面白いわ。さっきの会話聞かれてたのに、そんな態度取れるなんて」

「……え？どういうこと？」

「どういうことも、そういうことさ。こいつはさっきのあんたを起

こすやり取りを聞いていたのさ。いや、聞かしていたのさ」

「いや、でもほらきちっと立ってるし」

「よく見てみろ、口を引きつらして笑いを我慢してるじゃないか」

諏訪子はあろうことか、からかうためだけにあのような表情をしていたのだ。黒いのはいまいちこの状況についていけないようで、ただ呆然と立ちつくしている。

「……ええい、もう、諏訪子！今日も飲むぞ！お前も飲め！そして私のこの気持ちを発散させろ。いいな！」

「あ、はい」

黒いのは思わずそう答えていた。神奈子は涙目になっており、対して諏訪子は笑い続けていた

（何なんだ、この状況）

黒いのはそう思わずにいられなかった。

それにしても、神というのは酔いと言うものが無いのであろうか、連日の酒に倒れて、起きた日にまた酒を呑むとは。いやはや恐れ入るばかりである。

真っ黒、神を知るその２（前書き）

注意：人物が皆様の思っているものと大きく違う可能性があります。

真っ黒、神を知るその2

「飲んでいるか！？黒いの。おい、空じゃないか、ほら、私が注いでやるんだ、飲め！」

「おい神奈子、そうちまちまするな。ほらっ樽ごといったれ」

酒は飲んでも飲まれるとはこのことである。

黒いのの性質上食べ物は摂取しなくても生きていける、何しろ元は死神のような化物なのだ。食事という概念は他の魂を喰うことであるから、果実などを味わう、などという考えが湧いてこない。しかし、今の黒いのは人間であったもの、これになってから数百年も経ってはいない。つまり食事というものが必要なものだと思っている。

しかし、ここで問題にが起きた、味覚がないのである。毒のある果実を知らないまま食べても毒に侵されないが味がしない、食べたという食感しかないのである。もっともその事は吸収した情報と自分が持っていた情報を照らし合わしながらどのような味であったかというのを魂を操って偽る。という一手間がかかっている。

何を言いたいかというと、黒いのは今、酒を飲んでいる。黒いのにとって酒は酔うものであるから、たとえ、度数の低いものだとしても、もしかしたら、酒ではないものでも酒として出されたら簡単に酔ってしますのだ。

「ってちょっと待って、神奈子様、首掴んで何するんですか。まさか本当に突っ込む気ですか。お酒ダメになりますよ、ああ待ってお酒はゆっくり、飲む、も、の……」

簡単に酔わないようにとちびちびと飲んでいたのに、酒樽に突っ込まれたのだ。これを酔わないと思うのは至難の技であろう。

＊

「ふう、やっと潰れたか。おい、誰か、誰かいないのか！」

手を叩きながら人を呼ぶ。数秒経ち人が来る

「何か御用でしょうか、八坂様」

「ああ、すまんがその酒樽始末しておいてくれ。間違っても飲もうとするなよ。よくわからん妖怪を突っ込んだからな、そんな物飲んだら何かしら影響がでるかもしれん」

「かしこまりました。では、失礼します」

何も聞かずに、信者はただ酒樽を運べるよに数人を呼んだ。その間は二柱とも話さず、自分の盃を傾ける。それほどの時間も経たずに、運び終わり、すぐに信者がお盆を持って入ってきた。そこには銚子とそれに合う大きさの盃があった。神奈子はそれを見て、信者の顔を見たが、信者はそれを無視した。いい加減酒を控えろということなのだろう。もしくは単純に底が尽きたか。

「さて、諏訪子よ、このような得体のしれない妖怪を連れてきたのだ？」

「ふむ、そうだね……ま、興味が湧いたからだね。そもそも、こんな奴がいるなんて言ったのは神奈子の方じゃないか」

「確かにそうだが、こいつは本当に……妖怪なのか？微量だが神気を持っている。こいつは能力持ちで、その能力で自分の本質までも変えられるのは見てわかったが、神気までもはありえないだろう」

「神気については多分だけどわかるよ。こいつがどんな妖怪かも言ってたよね……私はこいつに少しだけ吸われた」

「は！？神までも吸うというのか……待て！なぜ吸われたのに大丈夫なのだ？」

「少しだけって言ったろ。多分こいつは自分より力量が上の者には吸い切ることができないんだよ」

「……そうだとしても、このまま放置しておけばいずれ神までもやられるようになってしまうぞ」

「大丈夫だよ。こいつは優しい、私に放り投げられても文句ひとつ言わなかった」

「その優しさが神を恐れてだったらどうする」

「しつこいねえ、なら今ここで始末するのかい？」

「……できるならそうする」

なぜ、諏訪子はそんなにのんきにいられる。そう神奈子は思わずにいられなかった。黒いのがこのまま成長していったら、神をも殺す存在となる。忘れ去られ、力を失っている神ならともかく、十分に力がある神を殺すなどは同じ神、しかも自分より上の位でしか無理なのだ。

ただ力が成長しただけで神をも殺せるようになる存在を恐れない方が変わっているのだ。

「考えが甘いねえ、そんなことしたら新たなこいつが生まれる。そして、新しいこいつは今のこいつみたいな性格をしていないかも知れない。」

「なぜそんなことがわかる。それにそんなの推測にすぎないだろ」

「……こいつは私たちの方に似ている。こいつはきっと人々の死に対する恐怖によって生まれた、死の象徴。それこそ全国の人の思いからね。まあ、妖怪として生まれたのは、自然が産土神を産んでその土地の調整を頼むように、自然が神として暴威を振るう前に強制的に介入して妖怪まで落としたんだろ。自然だって簡単に潰されたくないだろうからね。神奈子は神自身によって産まれたから気づきにくいかも知れないけど、上の連中は気づくと思うよ」

諏訪子はあくまで、人々の思いから産まれたもの達の頂点に立つ存在。とりあえず、いろいろ祀っていたら生まれたよくわからない神、対して神奈子は大国主の子と言うそれだけで位の高い、尚且つ、この地を治めているはっきりとした力ある神。しかし、その祀られ方は農耕や狩猟などもあるのだが、基本は軍神としてだ。軍神にそういう細かいことをわかるのは難しいだろう。

「な！？それじゃ、どうしろってんだい！今こいつを殺したとしてもまた新しいのが生まれてくる可能性があるんだろ。しかも今よりも悪くなるかもしれないんじゃ、手の施しようがないじゃないか」

「……出雲へ連れてけ。時期的にも、もうそろそろだ。私は行けないからな。あそこへは、誰かさんが怖がったから」

「……こいつを神に仕立て上げるのか。こちらがいつでも気付けるように」

「ああ、神にしてやれ。強制的にな。それこそ、名前に善の面が押し出すように和でもなんでも入れてやったらいい」

「……わかった。連れていってみる。だったら今回は少し早めに出たほうがいいかな」

（諏訪子よ、まさかこうなることを見越してこいつをここに連れてきたんじゃないだろうね……まさか、考え過ぎか）

神奈子は相方に対して相変わらず嫌な感じを拭い切れなかった。それは、彼女がここを治めるようになってからずっとだった。

＊

「……という訳でお前を出雲へ連れていく」

「はあ、俺が何か神気を持っているから神となることを認めてもら

うためにですか……そんなの別に俺神とかなりたくないんですけど」

朝起きにそんなことを言われてもさっぱりだろう。いきなり神になれだなんて、混乱しないほうがおかしい。

「駄目だ。それだと私達が困る。お前はこのままでも危険なのに更に強くなって、もし神気が増したらどうなる、いろいろな奴から狙われることになるぞ。そんなんで怨念垂れ流しながら死んでみろ、寝覚めが悪いじゃないか」

（まあ、悪いことじゃないだろうし、神の力持てばきっと能力の制御ももっとうまくいくようになるだろうけど、ちょっと急すぎるよな。俺が潰れてる間に何かあったのか？神社自体に何かあったような形跡はないし、暴れたとかではないと思うんだけどな。やっぱり俺は危険な存在だったのだろうか。俺はいてはいけない存在なのだろうか）

「……わかりました。しかし、どうやって出雲まで行くんですか？ここがどこかはわかりませんが時間がかかりますよね」

「うん？そら、簡単だ。上を行く。お前は掴まっていればいい」

「空ってことですか、なら俺も飛べますけど」

「速度が違うだろ。一人抱えて飛ぶくらいなんてことないさ。で、もうこの辺でやり残したことは無いか？少しだけなら時間は取れる。向こうへ行けば当分は帰ってこれなくなるだろうしな」

「いえ、特に無いです」

「そうか……では、皆の者行ってくる」

「「「いってらっしゃいませ」」」

飛び立って、少しした後、黒いのは神奈子にそう尋ねていた。

「……八坂様、洩矢様はいらっしゃられませんでしたね」

「ああ、諏訪子はああいう皆が集まる場所にはなかなか来ないよ」

「何か理由でも」

「んーちょっとね」

「そうですか、すみませんでした」

「謝ること無いさ。もうそろそろ飛ばすよ」

それっきり会話はなく、出雲までの空の旅は何事も無く進んでいった。

＊

「……着きましたか」

「ああ、着いたよ。……大丈夫かい？足がふらついてるよ、やっぱりきついのかい」

「いえ、少々ふらっときただけで特に問題はないかと」

「そう、ならいいけど。何かありそうだったらすぐに言うこと、いいね」

確かに問題はなかった。おそらく黒いのに諏訪子の神力が流れ込んだのがようやく馴染んできたのだろう。でなければ、神在月の出雲で妖怪が持つわけがないのだ

「はい、わかりました……ところで、八坂様、こちらへ向かって来ておられる方はどなたなのでしょうか？」

「え！？あの方はまさか！」

「やー早いね、一番乗りだよ。えーと君の名前はなんだっけ、ちょっと、待って今思い出すから……そう八坂刀売神だったよね」

「はい、その通りでございます。スサノオ様、ご無沙汰しております」

こちらに向かっていたのはスサノオだった。別天津神、神世七代の次に貴い神である。もっともスサノオはどちらかと言えば暴れん坊に近い神であったと黒いのは思っていたのだが

「ふふふ、そんな固くならなくても、なんならお祖父ちゃんと呼んでもいいんだよ。」

「いえ！そんな恐れ多いこと」

何とも親しげである。黒いのにとってこれには驚いた。何故かと

いえば、黒いのの生きていた時代は妖怪は勿論、神だって空想上の物だったのだ。黒いのは自分という存在がいるのだから、神がいてもおかしくないとは思っていたが、あのスサノオがこのような性格なのかと知って驚いているのだ。

「まあ、からかうのはここ迄にして……真っ黒な君、君はなんなのかな？妖怪のようだけど、神気も持っている」

まるで黒いのを奥底まで見て、そこから判断しているかの如く見られて、にやっと笑われたのだ。これには黒いのもたまらなかったようで身震いしている

「……ふーんなかなか面白い産まれ方をしてるね。で八坂ちゃん説明してくれる」

「それは皆が集まってからに」

「俺の事そんなに信用ない？」

「いえ！そんなことは」

「冗談だって。まあ、楽しみにしてるよ。またね、真っ黒い君も」

神奈子は大粒の汗をかいていた。なにしろ、自分とは比較にできないくらいの大物が自分のことを祖父と呼んでもいいなどと言っていきたのだ。これで、素直にそう呼んでいたら、他の神からどんな目で見られるか。しかし、それを断った時、もしもスサノオの機嫌が悪くなったらどうなるかとも考えた。スサノオという存在はそれほど扱いが難しい神であった。

「どうしました？」

「あ、いや、なんでもない」

それからは黒いのは驚きっぱなしであろう。自分の知っている神がこのような性格であったのかと知ったりして。更に神奈子の顔がころころと変わるのだ。それはもう面白いくらいに。神奈子の位はなかなか面倒な位なのだ。スサノオの息子である大国主の娘、尚且つ東日本で数多く信仰されていたミシャクジの頂点に立つ諏訪子の領地を勝ち取り、治めている。かと言って、自分より位の高い神はいるわけで、神奈子の顔はころころと変わっているのだ。

勿論、側に控えている黒いのについても話題が上がるのだが、それを全て後で話すと言うのだ。黒いのにとって内心どきどきであった。なにしろ後で自分の処遇を決める会議が行われるのだ。黒いのにとってそのような会議は先にそのことを出席する方に話を通しておいて、思い通りの結果を導くようにするものと思っているに、それについて聞いてきた方、全てをおざなりに後で話すと返しているのだ。黒いのにとってはたまったものじゃない。そのようなことが続いていると、

「アマテラス様のおなーりー」

少々抜けた声がして、その後に現れたのは日本で育った者ならほとんどが知っているだろう名だった。

確かにあれは太陽の神と言えるだろう。まるで光がそこだけにしか当たっているのではないかと思うほど眩しいのだった。それにしても最高位の神ということがある。さっきまでばらけていた神々が続々とアマテラスに挨拶に行っているのだ。

黒いのは、アマテラスから放たれる光を浴びてしまい、身を焼かれるような感覚に必死に耐えていた。それほどまで、アマテラスという存在は妖怪にとって毒なのだ。これを直接、真正面から浴びるなどしたら、跡形もなく消え去るだろう。

そのような存在であるアマテラスがこっちに来ていた。近づくたびに黒いのは焼かれる痛みが増し、歯を食いしばり耐えようとしていた。

アマテラスは黒いののその様子に気づき、顔をにっこりとしてまるで愛する子を見る母のような顔に安心させようとしていた。とはいっても、黒いのにそれを見る余裕はなく、意識が少し朦朧としていた。

「聞きましたよ、八坂刀売神。話したいことがあるのでしょう。ああ、隣にいる方のことでしょう。見て大体は掴めましたが、やはりあなたに話してもらうのが一番でしょう。さあ、話してください」

「かしこまりました。アマテラス様」

そう言って、神奈子は頭を少し下げ、元に戻し、話を始めた。自分のことなのに黒いのはそれを聞く気力がなかった。

真っ黒、神を知るその２（後書き）

建御名方神が都合を合わせるためいなくなり八坂刀売神が御子神となりました

真っ黒、神を知るその3

目の前でなされている会話に黒いのは何とか聞いていた。少しだけ慣れたのだろう。

黒いのは絶対に倒れたくなかった。ここで倒れてしまっては神になるなど認めて貰えないと思ったのだ。事実、二柱の会話を盗み聞きしている何柱かは、こんな奴が神になど、と、そういった感じで黒いの見ていた。

実際の時間は数分も経っていない、しかし、黒いのにとって、どれほどの長い時間であったことであろうか、精神的苦痛が絶え間なく襲ってきているのだ。しかも、その時間中は気を抜けないし、休める体勢をとれない。

そうして、ようやく。

「なるほど……やはり私だけで決定するには少々重いですね」

（アマテラス様だけでは決定できないとは、自分のことながら俺はいったいどのような存在なのだろうか）

黒いのはそう思った。

「この子について神議りを行います。八坂刀売神、彼を別室へ連れていきなさい。」

「かしこまりました」

黒いのの返事を聞く間も無く、神奈子が動き始めたので、それに黒いのもついていった

＊

「八坂様、私はいったいどうなるのでしょうか」

黒いのは別室へ向う途中、廊下でそのようなことを聞いた。自分が望む答えを出してくれることは無いだろうとわかっていながら、

「……悪いようにはならないさ」

「しかし、何故、私のことなのに私が話に参加できないのですか。私の能力が危険であり、その処遇を決定するものであるから、下手に話に加わってこじらせないようにするためですか」

神奈子はそれに答えることはなかった。

「着いたぞ。ここで待っていればいい。大丈夫だ、危険だからという理由なだけで排斥はされん……私もできるだけ良くなるように動く、安心しろ」

精一杯の嘘をつく。それでも、黒いのにとっては心が休らいだ。

「分かりました」

ただそれだけを言って、襖を開け中に入り、部屋の隅にあった座布団を持ってきて胡坐を組む。黒いのにとって、たったそれだけの

動作がひどく億劫に感じた。

（俺はどうなるのだろうか。もしここだとしても、死んだとしたら悲しむ者など……あの山の主はどうだろうか、悲しんでくれるだろうか。いや、それも定めなどと言って悲しむことはないだろう。あいつはきっとそういう性格だ。旅の途中でも友達と呼べるようになるまでにいった奴はいなかったし、親しげに知り合いと言えるようにもなった奴はいなかった。洩矢様だって八坂様から話を聞いていなかったら無視していただろうし、そもそもあの御方達と俺は親しいといっていいのだろうか。きっとあの山の皆がおかしかったのだろう、誰だって好き好んで真っ黒で不気味な奴と一緒に、友達になる奴なんていないだろ。

この世に生を受けてすでに人間の感覚にとってはありえないほどの時間を生きた。俺の人生は良きものだったのだろうか……いろいろな所に迷惑をかけてばかりだったような気がする。たくさんの生き物の命を奪い、たくさんの生き物の気を使わせた。そんな人生が良きものなどと言える訳はないか。俺の能力はこの世にあってはならないもの。これ以上迷惑がかからないようになるのならば、それが最後で最高の善行になるか。きっと痛みもなく）

「暗い顔してるわねー。だいたい自分の生涯は最低であったとか考えてるんでしょう。自分の生涯なんて自分で決めるものだけど決して迷惑かけたからって悪いと評価するのは間違いよ。自分がその行動に納得できたのならば、それは自分にとっては悪いはず無いのだから、他の奴の感情なんて無視しちゃいなさい。それとその方が良いと言っているのにあなたが否定してはだめよ、それはその方の行為を無碍にしているようなものだわ」

そのような出口のない迷路のような考えに埋没した時、机を挟ん

だ正面に非常におっとりとした女性が座って、声をかけた。もっとも、その女性は数分前からいたのだが、他のことが耳に入らなくなっていた、黒いのにとって、それを気づくことはなかった。

「ふふふ、驚いたわね。だったら成功、私の勝ちね。ほら悔しがりなさい」

勝ちとはどういうことだろうか、そう思う黒いのである。

「やっと、ましな顔になったわね。駄目よ、あなた唯でさえ黒いのにそんな感情に浸ってたら暗くなって更に黒くなっちゃうわよ」

「いや、言ってる意味がよくわからないっていうか」

「あら、なに、暗い表情をしている方に手を差し伸べてはいけないの？そりゃ勿論この世の中全員を救うなんて馬鹿げたこと言わないけど、せめて目の前の方ぐらいはやるべきよね。こんなにも面白い時の中で後ろ向きなことを考えるなんて阿呆らしいと思わない？」

実にマイペースな女性である。黒いのは何て答えたらいいかわからず、口を開くことは出来なかった。

「ふーん、まだ、さっきの状態から完全に立ち直れていないようね。よし。じゃ、さっさと、向こうに行って解決しちゃいましょう」

「ちょっと、せめて名前ぐらい教えて」

「いやよ、後で言ったほうが驚きが増すじゃない」

「はあ！？……もう、わかりました、素直について行きます」

「あら、だめよ。素直なんかじゃなく面白くするように努力なさい」

（もう勘弁して。訳が分からないよ）

黒いのはそう思いながらも、立って部屋の外に行こうとする彼女の後ろについていった。

アマテラス達がいるであろう部屋までの廊下を早足で歩いて行く。その彼女の足取りはどこか楽しげで、これから起こる、いや、起こすことにワクワクしているに違いないと断言できるほどであった。

「さーて、覚悟はいい？私は大丈夫よ。あなたもふにゃってしてないで、しゃきっとしなさい」

そう言ったものの、彼女は返事を聞かず、両開きの扉を豪快に開ける。その勢いは、もし近くにいたら吹っ飛ばされるんじゃないかと思うほどである。彼女は開けた扉をそのままにしてずかずかと奥へ入っていく。その歩みを止められるものは誰もいなかった。むしろ周りが道を作っていた。黒いのはそれについていくだけで精一杯だ。何しろ最初にいたところは広くて神々がばらけていたものの、今、この部屋は少し小さめで、集まっていたから、神気がひどく濃くなっていたのだ。

そして、奥までたどり着くと、目当ての神を見つけ、とても気軽に話しかけた。

「はーい、久しぶりねアマテラス。元気にしてた？私に関係がありそうなのに私抜きで面白そうなことやってるじゃない」

「ど、どうしてここにいるのですか！？」

「スサノオちゃんがねー教えてくれたのよ」

彼女がそう言ったら、どこからともなくスサノオ現れた。

「ちゃん付けは止めろって言ってるだろ。まったく。姉さんよ、こいつは母様の管轄だと思ったんだけどな、どうして断りもなく話進めちゃってんのかな？」

「それは……」

「あなただって大変だってことは分かるわよ。最近じゃ仏教ってのがこの国に入ってきた。そこには私達側の神がいない。全体が染まることは無いと思うけど、それでも信者は減るでしょうね。あなたが造ったといってもいいこの国を向こうの好き勝手されたくないってのも分かる。でもね、人ってのは変わりゆくものよ。変わりゆく流れに逆らってはだめよ。むしろ流れに乗っかって流れを変えちゃいなさい。そうすれば、ある程度楽になるわ。それにあなただけが頑張る必要なんて無いのよ。ここにはあなたが声をかけたら手伝ってくれるのがたくさんいるわ。だからね、もっとみんなを頼りなさい」

アマテラスが口を挟む隙もないほど、一気に話していく。

「お母様……」

「で、本題に戻るんだけど、この子私に預からしてもらえないかしら」

「……どうして、お母様が？」

「あなただってわかるでしょう？この子こんなにもおもし……私に似ているもの。だから調きょ……げふんげふん、立派な神にしてあげたいのよ」

実は本音を隠す気無いだろ。そう思う黒いのとアマテラスであった。

「わかりました。そこまで言うならお母様にお任せします」

ここでも、黒いのは一言も話すことはなく話が進んでしまっている。その事に、黒いのはもう諦め気味である。

「さーて決まったし、行くわよ。あ、それに名前も決めてあげなくちゃ、何て名前がいいかしら。あ、私の名前はイザナミね」

（そんなタイミングで言われても驚かねえよ。はあ、俺は流れに逆らうことなどできず、ただ激流に飲み込まれているのですね。）

そう思い、ただただ肩を落とす黒いのであった。

＊

黒いのは現在、黄泉国に来ている。しかし、その光景はおどろおどろしいものではなく、比較的明るく、住宅も何故か外のものよりいいものとなっている。そして、黒いのをここへ連れてきた元凶はと言うと、夫と言う方といちゃつき中であった。そして、そのいち

ゃつきを肴にして酒を飲んでいる亡者たちが遠巻きに見物していた。まさしく、混沌としていた

「いやー本当面白いなーおまえ、いろいろな形になれるし、こんなにもちっちゃくなれるなんて」

そして、黒いのはスサノオに命令されて、小さくなり、スサノオの膝の上に座っている。黒いのがここへ来るまでに彼女に自分のことをわかる限りのことを説明しているところに、イザナミの夫を呼びに行っていたスサノオがそれを聞いて命令したのだ。

「うっせーばーか。あれはいつおわるんだよ。おれのなまえきめてくれるんだろ」

「あーあれな、いつ終わるんだろうな。にしてもおまえ本当に面白いよ。その状態になると言動が幼くなるのに大きくなったら、その時の記憶あるんだろ。恥ずかしくない？」

（ええ、そうですとも、俺の神経がゴリゴリ削られていますとも。もっとも、こうなったのはそれを知った上で命令したあなたですけどね）

そう心のなかで愚痴る、黒いのであった。

「あれじゃね、修行が足んねえんだって、多分……よし、名前が決まったら俺が修行つけてやる」

「えーやだーつかれるー」

「やだってお前強くなれるんだぞ。かっこ良くなれるんだぞ。それ

に母様の属神になるってことは中々位高くなるんだ。そんなんで弱くてどうする。だからな、修行だ」

そう言って黒いの小さな頭をぐりぐりする。小さい状態の黒いのはどちらかと言えば子どもと言うより、がきんちょという表現がしっくり来る方なので、ぐりぐりされるのを嫌がり、脱出し、何とか普段の大きさまで戻る。その身長はスサノオと同じくらいだ。

「修行、よろしくお願いします」

（小さい状態でも言動が大人な状態にできるのなら、どれだけ厳しくても来い！）

黒いのが修行を受けた理由の半分はそんな思いであった。

「あー！大きくなるなよ」

「そうよ、あなたは小さいほうが可愛いのだから。それと、名前決まったわよ。あなたの名前はヨモノタマオクリミコト、で漢字に書くと黄泉御魂送尊ってとこかしら。尊にしたのはあなたがここに魂を送ってくる使命を持ってるってことだから頑張ってね。じゃ普段はどう呼んであげようかしら」

相変わらず、人が話を聞いていようが、聞いていまいが、唐突に話始める。

「タマオはどうだろうか」

「だから、だめよ。そんなの可愛く無いわ。あなた」

「むう、駄目か」

夫に駄目出しをするイザナミである。そのやりとりを見て、黒いのは先ほどの夫婦の秘密の会話は自分のあだ名をつけるためだったのだろうか、とそう思った。

「普通にミタマでいいんじゃないか」

「えー普通すぎない。ここはもっと」

「ミタマでお願いします」

「ぶー」

このまま、イザナミに決められるといい名前になるわけがないだろうし、むしろ、ミタマになってよかった。そう、安堵するミタマであった。

「しかし、子どもができたと聞いて驚いたものの、いざ見てみてこう真っ黒だとはな。君、いや、ミタマには驚かされっぱなしだよ」

「いや、あの、すみません」

「そんなに畏まらなくても良い。イザナミの属神となれば私の息子も同然だ。そこにいる馬鹿のようにもっと気軽に接してくれ」

「馬鹿ってどういう意味だよ！馬鹿って！」

こんなことをされてはなおさらに反応に困る。なにしろ、ここにいる神は全員が、たとえ日本神話に詳しくなくても目にすることは

あるだろう。そんな、神にやけに親しげにされて、すぐに順応できる方がおかしいのだ。

「あなた、驚くのはまだ有るわよ。ミタマちゃんってばなんと今よりずっと先の時代で生きていた子なのよ」

「はあ！？なにそれ」

「ほう、興味深い」

イザナミには話したものの、秘密にしておいてください。と、言ったことがいともあっけなくばらされた。

「ちょっと、イザナミ様」

「違う」

「……母様それは内緒にって」

なんと、この神は自分の所属の神だからという理由だけで母親と呼べと言っていたのである。

「こんな面白かった話内緒にしておけるわけないじゃない。あ、アマテラスちゃんには黙っててもいいわよ」

「……引きこもるんじゃ」

「ははは、姉さんの引きこもりは未来でも有名か」

ミタマはなぜか、そうぽろりと言葉が漏れていた。そして、笑い

話になってよかったと思っていた。

「いや、あれはスサノオ様」

「俺も、俺も」

「……兄様が原因じゃないですか」

「……」

知的好奇心から聞いたのだが、それについてスサノオはだんまりを決め込んだ。その上、口笛を吹いている。

「未来でも我々の行いは記録されているのだな。うむ、よきかな」

「それがね、あなた、私達は創作上のもので、私達や妖怪はいないことになっているのよ」

「なんと、我々はいないと。記録では残っているのにいないとは……この国を創るための都合のいい存在として我々が逆に創られたのか」

「ええ、多分そうね。まあ、それはいいのよ。何より酷いのは私がカグツチを産んで傷つき亡くなって黄泉国で化物みたいになって、それを見たあなたが私のこと捨てて逃げるのよ。しかも、その後に穢れを落としたものからアマテラスちゃんたちが産まれたことになってるの。どう思う」

「なんと、愚かなことか。たとえお前がどんな姿になろうとも私がお前を捨てるわけがなかろう、こんなにも愛してるのに」

「ああ、あなた……」

そう言って、イザナミを抱きしめる、イザナギであった。そこには、ミタマが人間であった頃の神話に記述されていた、イザナギが妻を怖がって逃げた。何てことは起きないだろうと感じさせるほどの熱さがあった。

「兄様、母様たちはいつもこんな感じなのですか？」

「うん、まあ、そうだな。その記録と大きく違ってて驚いたか。ああ、それと兄貴って呼んでも別にいいんだぜ」

「さすがにそれは遠慮します。他の神にどんな目で見られることかわかったもんじゃないんで」

「そんなの気にすること無いのに、ほかの有象無象の奴らよりお前の位はずっと高いんだからな。しかし、ああなっちまったらもう止まらんからな。よし、もう修行するか」

「よろしくお願いします」

その修業が地獄のようなものだと知らずに、ミタマは元気よく頷いていた。

真っ黒、修行する

「ミタマちゃんはー、まだ神力全然なのよねー」

イザナミはミタマがどれほどの力を持っているか試しているときに、そんなことを話しかけた。

「えっ、何ですって？」

「よそ見すんな！」

スサノオの拳がミタマの腹にえぐるように入った。

スサノオの基本は剣による戦闘なのだが、もちろん、徒手空拳とて達人といっていい域にある。その達人の域にある神の拳をまともに食らったのだ。

「ひ、ひどい……」

そのようなことを言い残し、ミタマは倒れた。が、力加減が効いていたのか、気を失うまではいかなかったようだ。

ミタマは自分を見る視線に耐え切れず、土を払いながら立った。

「でさー、もう一度言うけど、ミタマちゃんって神力無いのよね」

「そりゃ、あの諏訪のでか蛇の神力をちょっと吸っただけなんだろ」

「その時は意識なかったんですけどね」

「じゃあさ、信仰を得るまで、私たちの神力で補っておかない？」
「何！危ないかも知れないことを妻に最初にさせるものか。ミタマ君、私から先に吸収しなさい」
「あら、あなた、ミタマちゃんのこと信じられないの？ひどい」
「ち、違うぞ。私はただ、もしもの時があって、それでお前を失うのが嫌なんだ」
そう言い、再び抱きつく夫婦神。そこには、誰にも入ることはできない空気ができてあった。
「……あの二柱は放おっておいて、まあ、俺から吸えや」
「大丈夫なんですか？」
「大丈夫だって、今なら俺とお前の格が違いすぎるからな、死ぬことはないだろ。まあ、もしも吸いきったら、その体の主導権、俺に寄越せ」
「……はい、わかりました。それじゃあ」
ミタマはスサノオに近づき、スサノオの腕をつかんだ。すると、スサノオの神力がミタマの方へゆっくりと流れ始めた。一気に流れないのはスサノオが言った通り、格が違いすぎるのだろう。微量ずつしか減っていかないのでスサノオはなんともなかった。むしろ、
「おお、これ、おもしろ。これ、体軽くなって健康になるんじゃね」

この状況を楽しんでいた。少しすると、

「うぷ、兄様、もう無理です」

そう言って、手を離す。やはり、スサノオの顔は平然としていた。

「あー。まだ、向こういちゃついてるからな、こっちで進めっか」

そういうと、スサノオは腕をミタマの方に向けて上げた。すると、どこからともなく剣が現れた。

ミタマは平然を装っているものの、内心ドキドキであった。

「これは、神力で作った剣だ。ついでに言うと、いま着ている服もそれだ。何で、あり続けているかというとだな、神力で作ったものは壊れるか、自分で消す以外なくならないんだ。でだ、お前には服を作ってもらう。いくら性別がないような体してたって、服無いの嫌だろ」

「確かに服は欲しいなって思ってました」

「よし、じゃ、まずは想像しろ、どんなのがいいかってな。で、次はその形を作るように力を込めろ。そしたら、できる」

何とも、大雑把な説明である。しかし、スサノオはそれが正しく簡単だと言わんばかりの眼差し。ミタマは呆れつつも、他に考えが浮かばないので実行することにした。

神力を得る以前から能力を使うことはできていたのだ。だから、

力の種類が変わろうとも力を込めることなど簡単であったようで、ミタマの周りに光ができる。瞬間、服など着ていなかったミタマが真白の着流しのような物を纏っていた。しかし、集中しているようで出来上がっていることに気づいていないようなのだが、

「おおー、へー、お前の服中々面白いな、そんなのが流行っていたのか？」

「へっ？できとる。ああ、いや、流行っているというより、憧れですかね。一度こういうの着てみたかったんです」

そう言いながら、少しだだけ帯を緩め、良い感じに、肌が見えすぎないように崩す。

「よし、後は空を飛べるように、だが」

「鳥とかの形じゃなくてですよね」

「勿論。まあ、想像するのがここまで簡単にいったから、きっと飛ぶのも簡単だぞ」

「空飛ぶのも神力の応用ですか？」

「そうさ」

そう言って、スサノオはひょいと宙に浮いた。

「でだ、ここから進むには、進みたい方へ力を放出する。それから、止まりたかったら、放出を切るか、逆噴射だ」

言いながら、実践してみる。その様は実に手馴れたもので右へ左へ、上へ下へと駆け抜ける。

ミタマはそれを見て、自分が浮いている所を想像していた。すると、体が徐々に浮き始めている。先ほどのようにミタマはすでに能力の行使というものがどういうものかがわかっているのだ。今までに、飛べていなかったのは、自分が空を飛んでいるという姿が想像出来なかったのだろう。だが、一旦できる所を想像したら、その想像を元に能力が補佐し始める。ミタマが想像し、それを行使できるほどの力があれば、不可能なことはあまり無いのだ。もっとも、想像できなければ何の意味もないのだが。

「ふーう……出来ましたね」

「まったく、教えがいの奴め」

ミタマはぎこちなく、空を進み始める。そして、スサノオの軌跡を追いかけ始めた。それに、負けじとスサノオが速度を上げる。まるで本当の兄弟のように遊んでいるかのようだった

＊

「第二の修行。それは戦いにおける気持ちの有り様。神にとって死はほぼない。それでは、どのように決着をつけるか。それは相手に負けを認めさせるか、死を感じさせるかだ。で、死がほぼない神が死を感じたらどうなると思う」

「……死ぬのですか」

「その通り。それで死んでしまう。まあ、神が鍛え上げた武器なんかで攻撃されたら死ぬけどな。今じゃ、そんな事やるやつはあんまりいないし。自分の神力で創り上げた武器で戦うのが主流になってる。まあ、お前は強くなれば簡単に殺せるような物騒な存在でもあるのだがね。おいおい、そんな顔すんじゃねえよ。俺の弟でもあるんだぜ、お前は。そんな奴を消したりするかよ」

「わかるのですか？顔が無いのに」

「あーなんかな、顔がわかるって言うより感情が伝わって来るってか。母様がお前のことを息子って言い始めた時からわかるようになった。あれだろ、心を開いたらわかるようになるんじゃね。おいおい、言いたいことあったら言えよ。うれしそうな感じが、めちゃくちゃ伝わってくんだけど」

「ありがとうございます……それじゃ、第二の修行を始めましょうよ」

「そうだな。よし、今からやることにお前は絶対に死ぬとは思うなよ、絶対に」

スサノオは神力で作った剣をミタマめがけて一気に振り下ろした。

その一撃はミタマの体を肩から、まるで紙を切るのと同じように詰まることなく胴を抜けていった。

何をされたか理解できる前に、ミタマは目の前が暗くなっていった。瞬間、スサノオが、

「ミタマ！」

そう叫んだ。

「――！」

ミタマは声になっていない叫びを上げた。その叫びは無意識に魂を操る程度の能力を発動しており、この攻撃を食らっても死なないという認識を作った。すると、見る見るうちに切り傷が治っていく。

「ったく。一瞬焦ったじゃねえか。お前を殺したりしたら、俺がどうなってたことか」

急に起こったことについていけないミタマであったが、スサノオへの文句より先に思ったのは、

（あれを食らっても死ぬと思わないようにするとか、これからの修行どうなんの？）

これからの修行内容に恐怖するのであった。

「よし、外行くぞ」

そう言って、黄泉国から出ていこうとするので、

「あの方々はいいのですか？」

「……もう、ほっとけ」

今なおいちゃついている夫婦をどうするのか尋ねたのだったが、

これにはスサノオも放っとくようにしか言えなかった。もっとも、あの夫婦はスサノオを信頼しているからこそ、任せているのだろうが。

＊

「遅いのである」

「何言ってやがる。黄泉と外とじゃ、時間の流れが違うだろ。それに、こいつは今日神力を使い始めたんだぜ」

黄泉から出て少しした所に、スサノオより縦にも横にも大きい、ガタイの大きい男が声をかけてきた。その横には、同じように長身だが、細い男が居た。

「お主の名はなんとなった」

「黄泉魂送尊と申します」

「通称ミタマだ。母様が息子にしちまったから、ミタマには俺のこと兄と呼ばせている」

「ほう、そうか儂の名はタケミカヅチ。好きに呼ぶといい。隣のが、フツヌシ。少々無口であるが、機嫌が悪いわけではない」

「はい、タケミカヅチ様に、フツヌシ様」

「……気軽に呼ぶと良い。タケミーとかフツヌーとか」

「いえ、さすがにそれは。それに、私にはこれがあっているので」
さすがに知り合ったばかりの神にそんなに親しげにする度胸はないミタマである。
「ははは、いいねフツヌシ。俺、これからそう呼ぼうかな」
「それでは、スサノオはどう呼ぶのだ」
「……バカノオ」
「はっはっは、いいぞフツヌシ。さすがだ」
「おい、莫迦ってなんだよ。俺は確かに突拍子も無い事すっけど、莫迦じゃねえよ」
目の間で繰り広げられる三柱の会話についていける気がしないミタマは、
（日本の神って、自由なのが多いのは聞いたことあるけど、ここまでなのか）
自分が神話を多少知っているだけに、ただただ戸惑うだけであった。
「さてと、それではミタマよ。スサノオから戦いについては基本的なことはきいているのだろう」
「はい、簡単に言えば、心を強く、ですね」

「ふむ、そうだ。我々、神にとって戦とは自らの威信に関わるものだ」

「……ま、ここにいるのみんな軍神だからね。戦いが仕事っていってもいいし」

「まあ、お主は軍神ではないから、戦うのは少ないかもしれんが、それでも、戦う術は知っておいたほうが良い」

「そんな訳で俺がこいつらを呼んでおいたのさ。お前を本格的に鍛えるために」

「それは、皆さんに稽古をつけていただくと言う事ですか？」

「その通り。じゃ、地上にいると被害が大きくなりそうだし、空行くぞ、空」

ミタマたちは、地上に被害がでない程度の適度な所で止まった。空は青く少し雲がある程度、そして、風はほぼない。実にやりやすそうな天候であった。

「さっき見たけど、ミタマって武の経験無いよな」

「そうですね、ほぼ無いって言ってもいいです」

「あーじゃあ、どうする？」

「儂からでいいのではないか？やはり、素手をわかっていない状態で武器を持たすのはあまり良くないだろ」

「そうだな、疲れすぎない程度にやれよ」

スサノオとフツヌシは剣で戦うのを主流としているのに対し、タケミカヅチは何でも使う。その上、手が氷や剣に変わったりするという変わった力の持ち主だ。

「わかっておる、では、ミタマよ。好きに構えい」

「よろしくお願いします」

ミタマは手を胸のあたり、対するタケミカヅチは右手を顎の前、左手を肩の高さに置き、腰を落とす。その構えはボクシングのに近いものだった。すると、その姿が霞む。瞬間、タケミカヅチがミタマの前に現れ、右拳を振るう。

が、それは空を切った。

ミタマがよけれたのは、賭けに近かった。ミタマは格闘技に詳しいわけではないが、殴ってくるのなら、顔か腹だろうと決めていた。だから、タケミカヅチの姿が消えた瞬間、体を大きく左へそらしたのだ。

「ほう、感はいいようだな。だが、甘い」

そう言うと、ミタマは自分の右脇腹が痛むのを感じた。タケミカヅチが放ったのは、右だけではなく、それが避けられるとわかると左拳を相手の脇腹に打っていたのだ。それに、気づき、強烈に痛みを感じ始め、悶える

ミタマは痛みを全く感じず過ごしてきたわけではない、あの山の猪はもちろん、旅の途中でも戦ったことはあった。しかし、今の一撃は単純な力によるものではない、技による一撃。その痛みは比べものにならない。

確かに神は死なない。死は一瞬の内に襲い、消える。しかし、痛みは継続だ、その痛みを消さない限り感じ続ける。

「ミタマー、さっきのと一緒だ。治せー」

スサノオの言葉を聞いて、痛みを消し始める。そして、呼吸を整えていき、再び構える。その目には、闘志の火が点いていた。

「ふむ、いい目だ。では、互いに楽しもうぞ」

そんなことを言いつつも、先ほどと違い速度はゆっくりめで、威力も抑え気味。あくまで、これは修行、ミタマを育てる目的なのだ。そこらへんを履き違えてはしていないタケミカヅチであった。

＊

神々が出雲に集まる期間の最後の日。その日もミタマは、あの三柱に修行をつけてもらっていた。その内容は締めと言うことで、今までよりも激しいもの、つまり、三柱全てを同時に相手取るというものだった。そのような内容であるにも関わらず、地上では、それを肴に神々が宴会を開いてた。そのことにアマテラスは最後だからしょうがないという顔をしているものの、

（まだ、話したいことがあったのに）

そう、心のなかで愚痴っていた。

上空で青白い火花が散っている。ミタマは自らは攻撃に向うことはなく、避けるか、防ぐかで精一杯だった。

「最後だからって手加減は無いんですよね」

「そりゃ、下手に手加減したら修行になんねえよ」

「これでも、手加減はしているつもりなのだがね」

「……やっぱり、剣で加減するのは難しい」

そう言って、最初に動いたのはスサノオだった。一瞬でミタマとの間を詰め、右袈裟斬りにかかる。すると、甲高い金属音が鳴り響く。ミタマの肩の周辺は金属特有の光沢ができていた。ミタマはこの修業の期間中に能力の成長を遂げいていたのだ。それは強化。自身の構造を変えることによる、変化的な強化。変化的故にいろいろと応用が効き、今のように、金属のように変えたり、自身の重みを変えたりする事ができるようになった。

後ついでに部分変化をできるようになっている。このことで、体の形を変えても普段の調子で会話することができるようになったのだ。その事を知った、イザナミが落ち込んでいたりしたのだが、その事をミタマは知らない。

「どうですか、兄様の突然の一撃もこれで耐えれるようになったのですよ」

「ふん、甘いんだよ。この程度で俺を止めれるとでも」

そう言うと、剣を頭の上に掲げ、真下に下ろす。ミタマに対し、頭から唐竹割りを行う。先ほどように止められることはなく股から抜けていき、その勢いを持ったまま、左から横一文字斬り。ミタマの体が４つに割れたものの、瞬時に繋がっていく。

「はあ、はあ、死ぬかと思った」

ミタマは大きく距離をとる。もっともこの程度の距離など無いに等しいのだが。ミタマが呼吸を落ち着かせ、次は誰が来ると、顔を上げた時、自身の左胸から、刃が突き出ているのが見えた。その刃はそのまま、左へと腕もろとも斬り抜ける。

「……油断、大敵」

その言葉を聞き、せめて一矢報いようと拳を振るうが、空を切る。フツヌシの剣は、全長２．７１ｍ、刃長２．２４ｍの直刀という長大な直刀である。いくら、胸を突き刺さるほどとは言え、それほどの長さ持つ剣だ、ミタマとフツヌシの間は大きく空いている。空を切るのも無理は無いだろう。

再び、傷を治し、次はタケミカヅチか、と、いた方へ顔を向ける。その時、顔めがけて青白い光が襲って来るのが見えた。

「――っ！」

電撃を視認できうるだけで十分におかしくなっているのに、ミタマはそれを避けた。自身を足の方へ集まるように極限までに小さく

した上で神力を力限噴出したのだ。しかし、その小さくなったミタマめがけて、何度も正確無比に電撃が襲って来る。これに堪らなくなってきたミタマは、タケミカヅチに対し、特攻を仕掛けた。何度も避け、どうにか、その目前まで辿り着き、大きくなる勢いと共に拳を振るう。

しかし、それは罠であった。タケミカヅチはそれを難なく受け止め、手を剣に変え、ミタマの手を落とす。その上もう片方の手を氷に変え、ミタマの腹に突き刺す。すると、腹を中心に凍っていく。

ミタマはすぐにその凍っている部分を棄て、体を創る。そして、

「破っ！」

その声と共に、凍っているのが爆発した。

しかし、そこには、爆発をなんでもないかのように、傷を受けた様子がないタケミカヅチがいた。

「やはり、練度が足らんな」

「無茶言わないでください。たったの7日でここまで来たんですから。まだ良い方でしょ」

「ぬう、そう考えれば、そうであるか。時に神力は足りておるか」

「少々心もとないです。妖力を使えば別でしょうけど」

「だそうだが、スサノオどうする？」

「じゃ、これで終わるか。さて、飲むぞ、ミタマ！」

そう言って、ミタマの肩に手を回した。

「……飲み比べでもするのかい？」

フツヌシが訊き、

「それもいいな！」

スサノオがおもしろそうだと言わんばかりに答える

いろいろ話しながら、下へと降りていく一行。そこには、わらわらと神々が集まっており、次々とミタマに声をかけてくる。すでに、ミタマは皆から認められていたのだ。なにしろ、軍神三柱の修行に耐え切ったのだ。そこに畏敬の念を持つ神までいる。

「えーい！お前ら五月蝿いわ！」

スサノオがそう言うと、一斉に黙る。

「――では、新たな仲間の誕生と門出を祝って、乾杯！」

大きな声で宣言すると、場が一気に盛り上がる。そこには、上下関係などなく、ただただ酒を飲み交わし、楽しんでいる。中には、酒をミタマにぶっかけているのもいた。

そんな中、奥のほうでアマテラスが頭を抱えていた。神の中では珍しく生真面目であり、優秀な彼女は残っている案件をどうしようかと悩んでいるのであった。もういっそ、また引きこもろうかな、

と中々物騒なことを考えたりもしていた。

＊

あの期間が終わった後、ミタマはこの地にある神社を回り、分社を建ててもらっている。その目的は、ミタマの役目である。死者を黄泉国まで安全に送り届けるというもの。しかし、それを行うにはミタマ一人ではできない。そこで、分社が出てくる。各地に分社を建てることでミタマに信仰による神力が生まれてくるのだ。そうすることで分霊をつくることができる。その分霊が役目をこなす。これは、アマテラスからの提案であった。彼女曰く、

「たくさん作って、いっぱい霊をお母様のところへ送ってください。そして、忙しくして、あそこから出れないようにして」

そんなことを言っていたのだ。勿論、本音ではないようで、ミタマがからかうと。

「違いますよ！ただ、最近仏教ってのがこの地に来ましてね。私の予想では結構広がると思うんです。その仏教の死生観は私達のものと違っていまして、お母様のところへ行く霊が少なくなるのです。そうしたら、お母様が寂しくなってしまう。お母様があそこにいるのは自分の子ども達を見守るためなの。昔は、今と比べて戦いが多かったから。それをするためにあそこに元いた神から統治する権利を譲り受けてた。でも、それせいで、あそこから出れなくなってしまったそうなの。唯一許されるのがこの期間中だけ、お父様やスサノオは結構無理して、あそこに入っているの」

そんなことを零したのであった。それに、ミタマは、

「ええ、任せてください。それに、定期的に会いに来ないとどうなるか、って、脅されましたから」

そう言って苦笑いをするミタマを見て、アマテラスは、

「……そう、じゃあ、お願いするわね」

そう言い、微笑んだのであった。

その事を思い出し、ちょっと可笑しくなったミタマは次はどこに行こうかなと、考えながら、時折自分の分霊が飛んでいるのを見て、頑張っているな、他人ごとのように思ったのだった。

真っ黒、修行する（後書き）

あれ、あんま修行の場面ないな

真っ黒、かぐや姫を知る

各地を回り分社を建て、神力が信仰により常に保てるようになったミタマは、現在とある家で猫の姿になって居た。

季節は夏。時間帯は夜。気温が下がり、やや過ごしやすくなっていた。

一人の女性が縁側へとやってきて、その場に座った。

「こんばんは、猫さん。居るんでしょ」

そう言って来た。ミタマは縁側の下に居り、その声に応えるようにそこから出て、ひょいと上に上がった。

「ふふ、相変わらず、夜にしか出てくれないのね」

その女性はミタマを自分の方へ引き寄せ、背中を撫でる。その手つきは猫を喜ばせるというより、自分を落ち着かせる様なものだった。そのことに特に嫌がりはしないミタマであったが、猫として感覚がちょっとだけ嫌がっている。

「駄目よね。結婚から逃げてばっかりじゃ、お父様を悲しませてしまうのに」

それからしばらく撫で続けていたのだが、

「かぐや姫様、あまり夜更かしすると体に障ります」

侍女のような女性に声をかけられ、そうですね、と返事し部屋へ戻っていく。

侍女がミタマが居た方を見るもそこにミタマはおらず、すでに逃げていた。

（それにしても、かぐや姫ねえ、結末が気になって居続けてるけどこんなに展開が遅かったっけ？）

そう、先ほどの女性は現存する日本最古の物語文学と言われる竹取物語の主人公こと、なよ竹のかぐや姫である。ミタマは物語の最後、月の民が少々気になってここに居続けているのだ。かぐや姫の愛玩動物として。

ミタマがここに居るようになった理由は、かぐや姫の地上でのお父さん、竹取の翁こと讃岐造に拾われてきたからだった。

＊

人気のない竹林の奥深く、ミタマは特にすることもなくなっていたので気まぐれに猫の姿になってウロウロしていた。この日に竹林に居たのはただ涼しそうだなと思ったからだった。そこで、讃岐造とであったのは偶然か必然かどちらなのだろう。

「かぐやよ、どうしてそれほど結婚を嫌がるのだ」

この日讃岐造は腕を鈍らせぬように竹を取りに来ていた。しかし、愛する娘への愚痴が腕を振るうより先に出ているのだった。それ故

に普段は来ない奥にまで来ていたのだった。

ミタマはその声をその猫の耳で聞き取り、どうしようか、と悩んでいた。しかし、先向こうが気づいたようでこちらに近づいてきていた。

「ほう……猫か？このような所でどうしたのだ」

そう言って、持ち上げ、ミタマの猫の顔を見ると、

「なんと、お主。眼がないでは無いか！……ああ、だから親からはぐれたのだな。かわいそうに」

ミタマが変化しているゆえに、その動物に象っているものの、その顔には口のようなものしか無く、眼などは無いのだ。しかし、不思議なことに触った感覚などはそっくりだったりする。

翁はミタマを撫でつつ、

「お主なら、かぐやに魅了されんだろうな。って、何を言っておるのだ。お主、家へ来るか？」

ミタマはかぐやという名前と竹林に来る爺さんにもしやと思い、それに返事するように、にゃー、と答えた。

「おおう、もしや人の言葉がわかるのか」

そう言って、翁はミタマを籠の中に入れ、来た道を帰っていったであった。結局は竹を一本も取らずに。

＊

「かぐや、只今戻ったぞ」

「あら、今日はお早いですね」

「ああ、今日はな、竹林の中で猫がおってな、その猫をかぐやに、と思いな。ほら」

翁はそう言いながら、背中に背負っている籠の中からミタマを取り出した。この時ミタマは不機嫌になっていた。この籠の中少々狭い上に揺れたのだ。翁はそうとは知らず、掴んだので、まるごと変化しているので猫の本性が出たか、翁を引っ掻いたのであった。

「ぬおっ！」

引っ掻いたミタマはそのまま縁の下へと潜った。

「あら！お父様大丈夫ですか」

「ああ、大事無い。服が破れてしまったがの」

「よかった。お父様、猫に何かしたのですか」

「いや、何もしとらんと思うのだがな。ああ、まだ奥におるの」

「そうなのですか」

そう言って、かぐや姫は翁が指さす辺りを上から覗きこんだ。

「猫さん、こっちにいらっしゃいな」

手を叩きつつ呼ぶ。ミタマはこのままでは話が進まないと思い、素直に外に出ていった。

「あら、まあ、この子眼がないではないですか」

「ああ、そうでな。親からはぐれたか、一人でおって不憫に思ってな。それに、眼がないのであったら、かぐやの美貌に魅了されんのではないかと思ってな」

「まあ、お父様ったら」

かぐや姫はそう言って、ミタマを抱え、頭を撫でた。この時ミタマは、

（確かに美人と言えるだろうが、どちらかって言うと大人って感じじゃないな。個人的にはもうちょい大きい方が）

このようなことを考えていたのであった。

その後のミタマは翁の屋敷の者に気に入られていった。何しろ、触った感触は体毛そっくりなのに抱いても毛玉ができず、掃除の手間が省けるし、餌は出されたら食べはするけども、基本昼間は縁側の下で丸まってじっとしてるか、どこかへ行ってるように見せかけ姿を隠している。しかも、乱暴に扱わなかったら、言うことがわかっているかのように振る舞いその通りに動くわ、家の中には人が呼ばない限り入ってこないし、爪とぎもしない、庭は荒らさないと、

悪いことなどなかったのだ。もっとも、あまりにも猫らしくないので妖怪の類かと疑われ、陰陽師を呼び占われたのだが、悪い結果にならず、むしろ貴い存在なのではないか、と陰陽師が首を傾げる結果となった。ミタマは黒いし大本は妖怪なのだが、今では神力が妖力を上回っているのだ。悪い結果になどなりはしない。

＊

ミタマがこの屋敷来てから、それなりの月日が立ち、今日はあの難題を出され、精巧な偽物を造り、騙せたものの金の取り立てに来られて、散々な目になった車持皇子、ここでは、藤原不比等などと言う大物となっている、人物がやってきていたのだった。

ミタマはあの物語の通りに進んでいく展開に耳を傾けていた。そして、翁が認め、彼がかぐや姫に迫っている場面で、ふと屋敷の外から、剣呑な空気が漂ってきた。それに、皆は気づいていないようで、そのまま話が進んでいる。ミタマは気になったので、そちらの方へ目を向けると、小さく穴が開いており、高さはちょうど子どもの背丈ほどの物だった。そこから、隠す気もなく人の気配がするので、皆にバレないように遠回りをして近づき、塀に音を立てずひょいと上がった。そこにいたのは年端も行かない女の子がいた。その女の子はその穴から、あれを見続けており、ミタマには全く気づいていないようだった。その女の子に対しミタマは、

（この感情は嫉妬？……ああ、あれの子どもなのかな。ふーん、かまってもらえないから拗ねているんだろうな）

とその女の子のことを分析しているのだった。そして、本来は声

をかけず、その姿を見て戻るつもりだったが、ミタマはこの後の展開を思い出し、あの男の非常にかっこ悪い場面を見るのはちょっとかわいそうかなと思い。女の子の上から小さく猫の声で声をかけた。

「――っ！」

女の子は驚きつつも、自分が隠れてここにいることに自覚があるのか口を押さえ声を出すのを我慢している。

ミタマはその女の子が驚き、少し下がったのを見て、塀と女の子の間に飛び降りた。そして、ここは自分の物だ何処か行けと言わばかりに丸くなり、動かなくなった。それを見て女の子は、

「ちょ、ちょっとそこに居られたら見えないじゃない」

小さな声で文句を言って来た。それを聞き、ミタマは顔をはっきりと見られないようにちらっと女の子の方へ向いて、すぐに元に戻した。それを見て、女の子はこの猫がここを退く気がないとわかったのか、

「うう、もう。お父様のばか」

あくまで小声でそう言って、どこかへ行ってしまったのだった。

その女の子の気配を強化までして、ある程度の距離まで離れたのたのがわかって、ミタマは満足気に塀を飛び越え、そのまま気付かれないように縁側の下まで行ったのであった。

そして、物語通りに話は進んでいった。

＊

夏も過ぎ、秋の涼しさを感じる頃になった時、かぐや姫は物思い耽るようになっていた。かぐや姫が月へ帰ってしまうのだ。その事はまだ皆には言っていない。その事を一番最初に言おうと決意したのはミタマにだった。かぐや姫は猫の姿をしているミタマに気を許していたのだ。ミタマはかぐや姫が悲しんでいるときはそれとなく近づき、慰めるように居て、嬉しそうにしているときは楽しそうに振舞ったり、この数年間かぐや姫と一緒に過ごしていたのだ。そして、屋敷の皆が寝静まり、人の立てる家の音がしなくなった時間帯にかぐや姫は縁側に座っていた。目に涙を溜めて。

それに気づいているミタマであるが普段とあまりに違いすぎる様子に上に上がるのを躊躇っていた。

「猫さん。起きているんでしょ……いいの、そのままにして」

かぐや姫がその場にいるものの姿の見えないミタマに声をかけた。そこにいることがわかっているかのように。

「私はね、この地の人じゃないの。月って言う所から来たの。私はね、そこでもお姫様だったんだ。でも、そこにいるのが嫌になったの。それでね、不老不死になる薬を飲んだの。不老不死ってわかる？簡単に言えば死ななくなっちゃうの。それはね、そのではやってはいけないことの一つだったの。私は最初から追い出されるつもりで飲んで、この地にやって来たの。でも、この前月から便りが届いた、迎えに来るって。そんなの絶対にいいことじゃないわ。だって私は許されない罪でここに来たのよ。それなのに迎えに来るなんて。

きっと私を閉じ込めて実験道具にする気だわ。あの人達の顔が思い浮かぶわ。ああ、どうしたら」

いままで溜めていた言葉と共に涙が流れかぐや姫は泣き崩れた。ミタマはすぐに飛び出しかぐや姫に近づき、慰めるように体を寄せた。かぐや姫の慟哭は続き、疲れ果てて眠るまで続いた。

かぐや姫が起きた。部屋の中にいて、着物が体の上にかけられていることに少し驚いたが昨夜のことを思い出し、理解したようだ。その時外から何かが擦る音がしたのに気づいた。外と部屋を遮る帳に人影が映り、その人影は舞をしているように見える。かぐや姫は気になり、着物を肌が見えないように着て、外へ向かった。

そこにいたのは子どもほどの大きさになっている猫の面を被ったミタマだった。ミタマは服をこの時代の物ではなく人であった頃の細かく色彩鮮やかな物にしていた。それはミタマの地肌である黒色と妙な一体感を醸し出し。そして、ミタマは各地を回っている時や出雲で集まる時に踊りがうまい神からスサノオが面白半分で教わさせた舞が、きれいに整えられた庭と合わさって、この世の物とは思えない物となっていた。

それにかぐや姫は、

「……」

見惚れて何も言えなくなっていた。そして、時々見える黒い肌と猫の面をみて、

「……猫さん」

そう呟いていた。やっと反応してもらえたことがわかったミタマは、

「やっと、起きて来てくれたね。君が起きるまですっと踊ってたんだよ。さすがに疲れたさ」

まるで、いたずらっ子のいたずらが成功した時のような声でそう言った。

その事に反応できてないかぐや姫を見て、

「うん？まだしっかりと起きてないのかな」

そう言いながら、縁側に座り込む。それにようやくはっとしたかぐや姫は、

「猫さんは何者なの？」

「うーん、言っていいのかな？まあ、いいよね。神様だよ」

「神様？何で神様がこんな所にいるの？何で姿を現したの？」

「最初はちょっとした暇つぶしだったんだけどね、居心地が良すぎて。それでね、君の昨夜の告白を聞いて何かしてあげたくなったんだ」

「何かって、助けてくれるの」

そう言ってミタマに詰め寄る。

「おっと、そんなに急に動くと、はだけるよ」

そう言うと、かぐや姫は自分がどのような状態か思い出し、着物をできるだけ直す。

「無用心だね。欲がある神だったら襲われてるよ」

それに対し、かぐや姫はミタマを睨んだ。

「おいおい、僕はそういうのがなくなっているから安心しなよ。でだ、僕は君を助けようと思うんだけど、ちょっと気になることがあってね。君は月から来たって言ったよね」

「ええ、そうよ。この地とは比べものにならないほど進んだところだわ。だけど、するこことなんて全然なくて嫌になったの」

「ふーん、そうなんだ。まあそこがどういう所か何ていいんだけど。ツクヨミっている？」

「つくよみ……月夜見のこと？」

「いるんだ。その人って結構長生き？」

「長生きっていうか、月の民は寿命はとても長いの。なにせ、穢れが全くないからね。でも、その中でも月夜見は長生きね。私の教育係の人が最初に月にやってきた中心的人物って言ってたもの」

「なるほどね、ありがと。じゃあ、ちょっと出かけてくるけどいつまでに来ればいいのかな？」

「この月の十五日」

「わかったよ。不安だったら、皆に相談しなよ。皆だって君が急にいなくなると心配するからね」

「ええ、そうするわ。でも、昨夜のことで問い詰められると思うけど」

「ああ、だろうね。じゃあ、また」

そう言ってミタマは空高く飛んでいった。

＊

十五夜、なぜか雨や雲で月が見えないことが多かったりする。しかし、今日、かぐや姫が月から迎えが来る日は珍しく雲一つなく、澄んだ夜空を見せていた。その空とはかぐや姫は曇っていた。ミタマは戻ってこないのだ。帝から派遣された兵が如何に屈強であったとしても安心できない。かぐや姫はそれほど、黒猫であったミタマに依存していたのだ。

そして時が過ぎ、夜が光る。周りを囲んでいた兵たちが呆然としていく。翁が月の民の言葉を聞いて言うこと従っている。かぐや姫はその事を眺めているしかなかった。

物語が進む。かぐや姫が物思いをなくす、天の羽衣を着せられようとした時、かぐや姫の視界が真っ赤に染まった。

「姫、ご無事でしたか。申し訳ありません。意外と隙が無く、時間がかかってしまいました。ああ、大丈夫ですよ。この地の者は薬を嗅がせただけですから」

「××なの……」

「はい、あなたの××です」

そう言って××と呼ばれた女性に抱きつくかぐや姫。その様子は信頼しきっており、あれだけ顔を曇らせていたのに、その顔に笑みが宿っている。

「どうして、私が戻りたくないってわかったの」

「それは勿論、あなたの顔を見ればわかりますよ。とても辛そうな顔をしていましたよ」

「そう……ありがとう」

「いえ、感謝の言葉はまだ後です。まずは逃げ切らないと。追手が来るかも知れません」

「ええ、そうね」

そう言って彼女らは屋敷を出て、少し離れてた所にある竹林の中を尚も駆けていく。その足取りは軽いようで重い。何時追手が現れるかわからない状況で暗い中を走るというのは中々苦しいものだ。

一瞬、光が走る。

「――っ！」

「××！」

「大丈夫です。腕を掠っただけですから」

事実彼女の腕からは血が出ているが、そこまでは深くないようだ。そして、光った方向の奥から何人もぞろぞろと出てくる。

「鬼ごっこはここまでですよ」

集団の先頭、格好も他の者とは違う偉そうな男が話かけてきた。その男の手にはこの時代より遥か先で銃と呼ばれるものが握られていた。

「おっと、お姫様。その女の前に出たって意味は有りませんよ。何しろこれに貫通できないものは有りませんから。おっと、このような地で過ごしたものだから忘れてしまったのですか。ふふ、いいですよ。一度受けてみますか？」

そのような言葉を吐いてくる。その顔にはにやにやとあまりいい顔とは言い難い表情を張り付けていた。

「××……」

「大丈夫です……いざとなったら私を置いてお逃げ下さい」

「おいおいおい！何巫山戯た事言ってんのかな。ここから逃げる？ははは、凄いね。この数から、どうやって。それにあんたが持ってんの単なる弓じゃん。それでどうすんのさ」

腕を広げ、こちらの優位は絶対だと言わんばかりに大仰な身振りをする。

「いいね。いままでお高くまとまってたくせに、いい顔だよ。まったく。ははは」

男の耳障りな嘲笑が響く。

その声を聞いてかぐや姫は××の怪我をしていない腕をぎゅと握る。

「姫様……」

そう呟いた××は安心させるようにかぐや姫の頭を撫でる。

「おいおい、人を無視すんじゃねえよ。おい、殺さない程度に撃て」

さっさとしろと言わんばかりに手を上げ、後ろに控えている人に合図を出す。

そして、暗い夜に似合わない光が走り、彼女らに当たる寸前、

『我を撃ち負かすことは叶わず』

やけに響いた声が聞こえた。

かぐや姫はその声と自分に衝撃がこないことに瞑っていた目を開くと、目の前にあるその姿を見て、

「猫の時と違って不親切ね」

そう言いった。普段と比べてやや小さいミタマはかぐや姫の方を向いて、

「英雄は遅れてやってくるってね」

その場に似合わない気楽な声を出したのだった。

真っ黒、月の民を知る

時は少し戻り、屋敷で××が月の民を皆殺しする前。ミタマはスサノオと共に夜空を中々の速度で飛んでいた。

「海の中に居るとかありえないでしょ。何考えているんですか」

ミタマが何度目かわからない愚痴を零す。それにようやくスサノオが、

「知ってるか？あらゆる生物は海から産まれた。つまり、海はあらゆる生き物の母と言うわけだ。だったら、子が母の元に帰ることは不思議ではないだろう」

そのようなことを言ったのであった。

「知ってるも何も私が言ったことじゃないですか」

「まあ、俺って海を任されてる神でもあるしー、どこで寝てようが自由じゃね」

何とも巫山戯た口調でそのようなことを言ったので、ミタマはスサノオの少し上に行き、体を捻り、後頭部へ蹴りを叩き込んだ。

「急に何すんねん！」

後頭部をなでつつ、急に蹴られたことに腹が立ったスサノオに対し、ミタマは、

「兄様も相当したそうじゃないですか。腹が立っただけで殺したとか、いろいろ聞きましたよ」

「むう、それを言われると……っていうか今日って何日。上見てみろよ満月だぜ」

そう言われて月を見るミタマ。

「……まったく、ほら、急ぎますよ」

「えー面倒臭いな。あ、もう急がなくてもいいわ」

そう言うスサノオに対し、ミタマは何言ってんだこいつ的な目を向ける。しかし、そんな視線には気にもかけずに、

「あっこ、さっき光がした。しかも、人がうじゃうじゃいる」

指を指しながらそう言う。スサノオの方があらゆる面でミタマを上回っているので、ミタマはそちらの方を向いて、感覚を強化する。

「ああ、確かに。って今、追い詰められてるじゃないですか」

「やっぱり、二人組の方が助ける方なのね。よし、じゃ」

そんなことを言うと、スサノオは普段とは違い小さくなっているミタマの首を掴むと、

「助けに行って来いや！」

ぶん投げた。

ミタマのドップラー効果が発生している声を聞いて、

「どんぴしゃ！」

満足気に笑ったのであった。

スサノオに投げられ、少しだけ叫び声を上げたもののその速度に慣れてきたミタマは、かぐや姫たちの状況を見ていた。

そして、いよいよとなった時、ミタマは念のためにと能力を発動させる。その上言霊効果で更に強化させて突っ込んだ。

（痛！しかし、ここで声を出さないほうが格好良いよな）

なんだかんだで、スサノオ達に感化しているミタマである。

「猫の時と違って不親切ね」

「英雄は遅れてやってくるってね」

その場に合わない声を出すミタマを見た、月の民の人たちは驚きが隠せなかった。彼らの武器は先頭の男の武器と比べると些か劣るか殺傷性は十分にあるのだ、にも関わらずあたったであろう人物は何ともないように立ち、話している。その上肌の色が不自然なくらいに黒いのだ。その時、再び光が走った。

「おい、急に来て、何話してんの？つーか、何で防げんの？お前何者？」

「……神様」

そうあくまでも気楽に言うミタマに対し、男は再び銃のようなものを撃つ。

「何だよ。何でだよ！これに貫通できる物は無いはずだよな」

ヒステリック気味に後ろの人々に話しかける。

「っていうか、神だと！？そのような貴い存在がこの穢れた地にいるはずがないだろ。冗談も大概にしろよ、この化物が！」

「……そう言われてもな。兄様、どうし、ま、す」

ミタマは近くに居るだろうスサノオに対してそう声をかけたものの、辺りを覆う怒気に驚き、声をうまく発することができなくなった。しかし、すぐに整え、

「何をそんなに怒っているのですか」

そう尋ねると、横からスサノオが現れ、

「何を、そんなに、だと。ミタマこれが怒らずにいられるのか！」

「……申し訳ありません。私には全く理由がわかりません」

「俺が怒っているのはな、お前が化物扱いされてること。この地を穢れた地などと言われたこと。何よりも俺の兄が居るであろう場所でそのような教育が当たり前のように行われていることだ！」

「（全く、兄様は……）私はこの者達と交渉して帰ってもらおうと考えていたのですが、殲滅しますか」

「そうであろう。俺はこのような者共と話す気など起きん」

スサノオが月の民の方を向き、腰にさしておいた剣を抜き、更に怒気を高ぶらせる。すると、先頭の男以外は身を縮こませ、ガタガタと揺らしている。そして、先頭の男は気丈にもスサノオを睨み相対している。だが、

「ふん、そのような時代遅れの武器で何ができる」

実際は相手の実力がわかっていない莫迦であった。

「何が、だと。ふん、何でもできるのさ」

一閃。そう、スサノオが一度剣を振るうと、先頭の男以外倒れ伏し、二度と起き上がることはなくなった。しかし、その事に気づいていないようで先頭の男は、

「何も起きていないでは無いか。こんなに離れているのに振ってどうする。莫迦め」

「ふん、大方親の地位などを引き継ぎ、あまりにも周りが甘やかすものだから調子に乗ったのだな。しかも、ろくに鍛錬などもせず、その武器の性能に依存。この程度の奴が上に立つ者とはな、好きでもないのにこいつの下につけられた者には同情したくなるわ」

「な、何を！巫山戯たことを！そんな事を言っておいて私を傷つけれてないではないか」

「撃ってみろ」

「あん、何を言っている？」

「だから、その手に持っているものをだ。それは玩具なのか」

「よほど、自分の立場をわかっていないようだな。いいだろう。望みどおり！」

男が引き金を引いた。スサノオはそれを剣で弾き返した。弾き返された光弾は男の眉間へと吸い込まれていった。

「へっ……」

男は自分が何をされたかもわからずに倒れていった

それを見ていたミタマは、最初に殺られた人の魂を集め、自分の周りに留めておいている。そして、あの男の魂を自分の元へ引き寄せ、

「兄様、これどうしましょう？殲滅って言いましたし、消しますか？」

「……そうだな、やれ」

「はい」

ミタマは漂う魂に触れていく、すると、その魂が消滅していく。

「相変わらず、恐ろしいな」

「何を言いますか。私にとっては兄様の剣技の方が恐ろしいですよ。私のこれは殺さないと無理ですし」

ミタマの恐ろしさとは魂をその魂のあるべき所へ行かさないこと、つまり、その魂が信仰している死後の世界に行くことはない。あらゆる世の中から消え去るということだ。もっとも、これを幸と取るか、不幸と取るかは人それぞれだろうが。

「そうか……それじゃ」

スサノオが呆然としているかぐや姫達の方へ向き、

「ツクヨミについて知ってること話してもらうか」

そう話しかけた。スサノオの本来の目的を達成するために。

＊

「あの莫迦兄はそんなことをやっているのか」

彼女らの話ではツクヨミはこの地にある穢れを嫌い、自分達だけの楽園を創ろうとして、月に見つからないように細工をして暮らしていたようだ。

「そう言えば、兄様はツクヨミが月にいると当たりを付けていたんですよね。何でですか？」

「……身内の恥を晒すことになるんだが、まあ、俺の方が酷いしいいか」

そうである、たとえツクヨミがそのような行動を取ろうとも、スサノオの方がとんでもないこととした回数が多いのだ。

「あいつは、一度神殺しちゃってな。それを姉さんに怒られて、月に逃げたことがあるんだよ。そん時は姉さんが上手いことやったから大丈夫だったんだけど」

スサノオの直系は何とも面倒事を起こす一族で有ることか。イザナミの突然の黄泉国統治に始まり、アマテラスの引きこもり、などもりだくさんだ。

「まあ、私はそのような方だとなんとなくわかってましたけどね」

「そうなの××。伊達に歳取ってるわけじゃないね」

「歳のことは言わないでください。それに私は月への船に乗るときにたまたま居合わせただけで、進んで行ったわけじゃないんです。月夜見に対する忠誠心なんて持ち合わせていませんから」

「だったら、月から逃げればよかったじゃない。まあ、おかげに私は良かったけど」

「……研究するのに良かったもので」

××は顔を斜めしたに向けつつ、小声でそんなことを言った。

「あのさあ、××だっけ？言い難いよな。今風に変えないか」

「え！」
「え！」
「え！」

三人の声が重なる。対して、スサノオは何で驚いているんだと言わんばかりな顔をしている。

「兄様どうして、発音できるんですか？私なんか何て言ってるかさっぱりなんですけど」

「そうです、これを発音できるなんて」

「あ？だって神代の頃に流行った付け方だろ。懐かしいなとは思ったけどさ。まあ、ミタマは発音できないのはその時代に生きてなかったからだろ」

「と言うことはあなたは」

「俺の名はスサノオ。聞いたことはあるんじゃないか」

「すさのお……スサノオ様ですか！」

「多分それ。ところでさ、お前の何処かで会った気がするんだけど、覚えてない？」

「……それは、岩戸隠れの際にオモイカネ様の付き人をしていましたから、その時に」

「ああ！オモイカネのね。じゃあ、そのちびっ子をその体にしたのもお前か」

「ちびっ子言うな！これでも都で帝まで虜にしたんだぞ」

「兄様にとってはほとんどの女性がちびっ子になるから」

そう言って、ミタマはスサノオに飛びつこうとしたかぐや姫を抑えている。

「ええ、その通りです」

××は後悔はないとはっきりそう言った。

「ふーん、まあいいさ。じゃあ名前だが……とりあえず八意でいいか」

「それは、ちょっと」

「不老不死にできる奴が謙遜すんな。そういや、ミタマはそのちびっ子殺せるのか？」

スサノオが突然そう言ったから、かぐや姫が飛び退く。

「うーん、殺せなくは無いですけど、時間がかかります。しかも、姫さんの場合もう長い時を生きてるみたいだから、どれだけかかるかわかりません。しかも、その間ずっと触れてなきゃ駄目ですし。ほぼ不可能ですね」

「分霊は？」

「分霊に吸い取る能力はつきませんでした」

「あんたって、そんな物騒な神だったの？」

「いや、ちびっ子。こいつは物騒じゃないぞ。むしろ良い奴だ。何しろ、死んだ魂を安全に黄泉国まで送り届けるという使命を持った神だからな」

「それの何処が良いのよ」

「いいや、途中で襲われる可能性がぐっと減るからな。しかも中々偉いときた」

事実神道を信仰しているものは一度黄泉国に行くと言う決まりがある。しかし、その道中に妖怪などに襲われる可能性があったのだ。人の魂は妖怪にとって食料の一種でもあったから、しかし、ミタマが側につくことでそれがなくなっている。もしも、襲いなどしたら報復が待っているのだ。

ついでに、偉いとは、死んだ者は祖霊となって、その土地の力になってくれる。それを他の、しかも、魂を滅する能力を持った神に渡さなければならない。それを無駄な軋轢なく行うにはミタマの位が高くないといけないということだ。

「ふーん、そうなんだ」

「自分ではそれほど偉くないと思うんだけどね。むしろ大変だから、いったいどれだけ分霊を作ったことか。しかも最近では故郷まで送ってくれって言われることあってね。母様に言われて送り迎えまで

やることになって、時々自分でも驚くほどの速さで駆けている個体を見つけることがあるんだよ」

「大変そうね……ああ、だからあの時猫になって休んでいたのね」

「あれは違うよ。彼らは一時的に眷属に入ってもらっているんだ。自然に生きてる動物ってのはどこかが足りてないと死が近いからね。眷属になって眼や耳の代わりをすることで死後の安全を約束しているのさ。ちなみに情報を伝えるかは彼らに任せているんだが、それで姫さんのことを聞いたんだよ」

「え、でも、あの後見てないし」

「私が一度でもあの黒猫だと言ったかい」

実際はミタマであるのだが、ミタマが人の形をとってかぐや姫の前に現れている時に黒猫だとは言っていないのだ。

「ほら、後ろを見てごらん。呼んでおいたよ」

そう言うとかぐや姫の少し後ろによろよろと探るように歩いてくる黒猫がいた。

「本当に、あの猫さんなの」

そう言って、近づき抱き寄せる。その目には涙が零れていた。

「おい、何小憎たらしい演出してるんだ」

そうスサノオが小声でミタマに話しかけてきた。

「そら、こんな奴に話聞かれてたなんて思うと恥ずかしいでしょ」
「まあ、確かにこんな奴に話聞かれてたなんて思うと死にたくなるな」
容赦のない言葉に思わずミタマは睨むもやはり意に介さないスサノオである。
「ありがとうございます。私達を助けていただいて」
八意が近づいて、そう言った。
「気にするな俺はあの莫迦兄の話を聞きに来ただけだ」
「まあ、私は彼女に会って、最後の告白を話していなかったら、そのまま、成り行きを見ていただけでしょうし」
「それでも、助けていただいたことには変わりません」
そう言って、深々と頭を下げる。
「顔を上げてください。これから彼女を守るのはあなたなんですから、あんな連中に見つからないように気をつけてくださいね」
「はい。姫のあの顔を守るためなら、どんなことでも」
「××、じゃなかった。八意こっち来て、猫さん触ったら、気持ちいいよ」

そう大声で八意を呼ぶ。それに八意は仕方がありませんねという顔で応じるが、その下にはきっと笑顔があるだろう。

「……兄様」

「わかっている。あの状態だと、ちょいと危なっかしいな」

「どうしますか？」

「……オモイカネの元に連れていけばいいだろ。元付き人やってたんだし」

「誰が連れて行くんですか？」

「お前に決まってるだろ」

「そんな、彼女との面識全然無いんですけど」

「そんなん知らんよ。兄命令だ、お前が行け。俺は説明すんのが面倒臭い」

そんな事を言われて、ため息をつき、

（今年母様のところへ行く予定だったのにどうしようか）

と、先のことを心配するミタマであった。そして、女性二人が猫と戯れている様子を見て、楽しそうでいいなと思ったのであった。

真っ黒、人と共に（前書き）

風邪で改訂作業遅れてしまいました。申し訳ありません。

皆さんも風邪なんかで寝て過ごさないように気をつけください

真っ黒、人と共に

木から木へと飛び移る黒い影がある。そう、ミタマだ。まるで猿のようなのだが、人の形をしている。何しろ、服が忍者だ。何故そのようなことをしているかというと、やはり暇なのだろう。ミタマの仕事はミタマ自身は関係ないし、やっているのはミタマの分霊なので、抗議なぞ起こりはしない。だから、暇なのだ。

その、ミタマの後ろの方から何やら、人の声が聞こえてきた。それに気になり飛び移るのを止める。そして、

「すまねえ。すまねえ。でもよ、自分の命を大切に思って何が悪いんだよ。あんな化物に俺らが敵うはずないんだよ。だったらよ、他の所行って教えてやったほうが良いよな」

そう言いながら走る男がミタマの下を通りすぎていった。その男の顔には恐怖が張り付いている。まるで、何かから逃げいているかのよう、いや、先ほどの独り言から実際に逃げているのだろう。

ミタマはもう一度言うが暇なのだ。やることなんぞ定期的にイザナミのところへ行くしかない。だから、この男と接触したら、暇を潰せれると、思っても不思議ではない。ミタマは走っている男より前に行って、木の上から声をかけた。

「そこの男何をそんなに急ぐ」

男は一体何処から声が聞こえたのかわからず、辺りを見渡している。

「上だ。上を見ろ」

「？……うわぁ！」

ミタマは木の枝に自分の体重を減らして、上手いことしゃがんでいるのだ。忍者服で。

「なにもんだ！あの化物の仲間か」

「ふむ、少なくとも人間ではないな。そして、化物であったら声のなどかけずに襲っているさ」

「じゃ、じゃあ。神様なのか」

「ま、そうであるな。で、なにゆえそんなに急いでいたのだ。話してみろ」

「ああ、それが、黒くて、うじゃうじゃしたでかい化け物が狩りをしていた俺達を襲ってきたんだ」

「黒くて、うじゃうじゃ、ね。何かしたのか？例えば、入ってはいけない所に入ったとか」

「そ、そんなわけねえ。確かに今日はいつもよく深く入ったけど、このあたりにそんなところはあるって話は一度も聞いたことがねえ」

「そうか。わかった。私はちょうど暇していたのだ。人助けするのもいいだろう」

「あ、ありがとうございます」

「で、それは何処なのだ」

「俺も行かないといけないのですか」

「でなければ、場所がわからんでは無いか」

「絶対俺が逃げたって里に伝わってる。逃げたやつがどうなるか……それに、この道を辿って行けばつくんです。お願いします」

「ふむ、仕方がないな。これを機により一層私達を崇めるのだぞ」

「あ、ありがとうございます。皆を助けてやってください」

そう言って、再び走って行く。よほど怖い目にあったのか、どこか人里に着くまでは走るのを止めそうになかった。

（黒くてうじゃうじゃね。祟りか、何かか。ま、いいさ。これで暇を潰せれる）

そのようなことを考えながら、木から木へと飛び移っていった。知らず知らずの内に思考が人の物から脱していると気付かぬままに。

＊

少しすると道に変化が現れた。それは、大きい何かが通った跡であり、それがある所は腐っている。大きさは幅１ｍを越し、地面が少し凹んでいる。足跡はなく、引きずった跡になっている。もっと

もこれはうじゃうじゃしたものが原因だろう。

ミタマは地面に降り立ち、足でその腐っているところを削った。

「……深くまで侵食していないか。これなら日が経てば治るな」

ミタマは通った跡を見る。どちらに行くべきか悩んでいるのだろう。

「……先に里に行った方がいいか」

ミタマは通った跡を辿るのではなく、そのまま里に向うことにした。

何度か矢などが刺さったりして、闘った形跡が見られる。それが先を進むごとに増えていった。

ミタマはそれらを見て、速度を上げていく。ミタマはあの男に助けると言ったのだ。それをここまで来て、間に合わないなどと、そんなことになれば意味がなくなる。ちっぽけだとしてもそれを達成できないのは意志の力を重きに置いているミタマに取ってあってはならないことだ。

森を抜けた。しかし、ミタマに映る光景は櫓に突撃する黒いうじゃうじゃした大きな化物だった。それに対し、ミタマは途中で拾っておいた、鏃を数個全力で投げつける。化物はさすがにそれだけでは倒れず雄叫びを上げ、頭の方を左右に振り何処から投げてきたのか探っている。それに応えるように残しておいた鏃を順番に投げつけた。方角がわかり、ゆっくりとミタマの方へ体を向けて、動き出す。

そして、その巨体の体重を乗せた突撃がミタマに迫る。それに対し、ミタマは腰を落とし、脇を締め、突撃を正面から迎え撃つ。そして、化物とミタマがぶつかる。

ミタマは両手でうじゃうじゃとした物の中にあった固い何かを掴んで、引き落とす。すると、化物の後ろが浮き、その瞬間ミタマは手を離し、その場で右手を後ろに引き、腰を捻り、拳を繰り出す。化物は後ろにずり下がったもののまだ生きているようで嘶く。まだ生きていることがわかったミタマは化物の背に飛び乗り、瓦割りをする空手家のように化物を一撃で叩き伏せた。

その場に化物の断末魔の叫びが響き渡り、その巨体がゆっくりと倒れる。すると、うじゃうじゃしたものが消えていった。勿論ミタマにも付いていたのだが、侵食できず表面で弾かれて、ミタマには何ともなかった。

ぐずぐずになっていてわかりにくいがこの化物の正体は猪だった。それにミタマは何とも言えない顔をしている。ミタマにとって猪とは強者なのだ。あの山の猪のその強靭な肉体による一点突破は今のミタマでも勝てないと思っているのだ。ただそれは、過去の印象に因る精神的敗北なのかも知れないが、それゆえにミタマは心の何処かでは猪を神聖視している所がある。

ミタマが一息ついていると、周りに人が集まっていた。しかし、声はかけてこず、ヒソヒソとミタマに聞こえないように彼らだけで話をしている。その様子にミタマは立ち去ろうとした。その時、

「お持ちくだされ！」

声がかかった。集まってた集団が割れ、そこから一人の男性が出てきた。長なのであろう、他の者とは趣が違う。

ミタマは無言で振り向き、その男性と相対する。

「その身から発するのは神力としか感じられませぬ。貴方様は神なのですか」

その言葉にミタマは驚いた。と言うのも出雲に集まる度に近頃の人間は我々を気づくことがなくなってきた、とぼやく神が多くなっているのだ。ミタマ自身も人と出会って神だと気付かれたことなど神社に務めている者にしかなかった。

「ほう、私が何者かわかるのか」

「ええ、私の家系は皆そういう事に鋭く、お陰で長などやっております」

「何故私に話しかけた。私はこの場から立ち去ろうとしたのだが」

「なぜかこの機会を逃してはいけないと、自然と声が出ていたのです」

「なるほどな、それならば仕方がない。これも一興だ。少々話し合うとしようか」

ミタマはその答えに呆気にとられ、少し笑い。そう言った。

「はい。では、なぜ私達をお助けになったのですか」

「そうだな……たまたま、暇をしていてな、空を飛んでいると、よろしく無い気配が漂って来たものだから、人助けも一興と思いな」

「それはそれは、私たちは運が良かったのですね。ありがとうございます」

「礼などいらんよ。単なる気まぐれなのだからな」

「それでもですよ。神様に助けられたなど、近隣の者に自慢できますから」

「そうか。ところでな、」

ミタマが続けようとした時、人だかりから一人の女の子が飛び出してきた。そして、ミタマにまっすぐやってきて、

「どうして、どうして、もっと早く来てくれなかったの！」

そう言いながらミタマをその小さな手で叩く。女の子の顔は涙でくしゃくしゃになっている。

「早く来てくれたのなら、お父さんが、助かったかもしれないのに」

女の子の慟哭は続く。長と言った男が動こうとしたが、ミタマはそれを制して女の子のされるがままに身を任せていた。

他の者は猪であったものはどうしたら良いか迷っているようで、そちらに近づこうとしていなかった。

＊

女の子が泣きつかれて眠る頃には日はすでに落ち、辺りは暗くなっていた。ミタマは女の子を抱っこしている。周りに集まっていた人はすでに解散しており、ミタマはこれからどうしようかと考えていると、

「泣き止みましたか」

そう暗闇から声をかけられた。

「私には見えるが、そのような所から声をかけるのはやめておいたほうがいいぞ」

そう言うとミタマの周りに青白い炎が現れる。ミタマは何気に多才でいろいろな技を習得していた。青白いのは魂を模しているからだろう。

「申し訳ありません。しかし、それは便利ですね」

「長もできると思うぞ、霊力の含有量が中々多い。尤も修行すればの話だがな」

「そうなのですか。しかし、この年で修行は厳しい物があります」

「そうか。でだ、私はこの子をどうすればいい」

「では、私の家に。あ、私が持ちますよ」

「いや、いい。このような事をしたい気分なのだよ」

ミタマは長の家へ行った。長らしく今まであった家と比べて大きいが、その中に人は居なかった。囲炉裏が燻っていたので、長が火をおこそうとしたが、ミタマが灰のある場所に火を移動させた。尤も青白いので良い明るさとは言えないかも知れないが。

「家の者は他のところへ行ってもらっています。これなら、話を聞かれることはないでしょう」

「すまないな」

ミタマは抱えていた女の子を自分の膝を枕にするように寝かせた。

「いえ。当たり前のことです。その子が来る前に何か言おうとしたことはあの化物のことでしょう」

「ああ、そうだ。あくまで私の予想なのだが」

「どのような結果でも、受け入れる覚悟はあります」

長のその言葉を聞き、ミタマは長の顔を見る。確かに覚悟があった。代々続く里を守るという覚悟が。

「一つ聞くが、ここ最近人死が多くはなかったか」

「……この辺りの里で流行病がありました。ここはそこから一番遠かったので被害は遅く、旅の薬師に助けられましたが、その子の母親などが」

「なるほど、この子の母親がね」

「ええ、ですので、父親が元気を出させようと張り切っておったのですが」

そう言い長は俯く。ミタマは女の子の髪を撫でながら、

「そうか」

ただそう言っただけであった。

「ところでな、最初の里はそうなった」

「噂ですが全滅と……」

「ふむ、やはり」

そう言って一呼吸おいて、

「あれな、最初は自然的な祟りと思ったのだが、よく見ると人の怨念の塊に侵されていた。わかるか、どういうことか」

長は何も言わない。いや、理解したが、言ってしまってそうだと言われたくないのか。長の顔にあった決意が揺らぐ、自然が起こしたのなら、それこそ人身御供を平然と行ったのだろう。しかし、人の物となると、どうしたら良いかわからないのだろう。

「君の考えた通りだよ。あれは、病によって、死んでいった者の怨念だ。おそらく、怨念が晴れるまで何らかの方法で人を襲い続けるぞ」

「どうしろと言うのだ。私達と何も関係ないじゃないか」

そう言って顔を手で覆う。

「怨念とはそういうものだ。あれによる被害は対象など無い。ただその猛威を振るうだけだ」

「私の代でこの里は終わってしまうのか……」

この時代すでに農地は国に管理されるようになってはいる。化物が出たことを、都に伝え、それを退治してくれるものを派遣して来るまでどれだけ時間がかかるかわからない。それなら、化物の及ぶ範囲から脱しようにもその範囲がどこまでかわからないし、仮に脱したとしても里ごと移住するのなら何も無いところを一から開墾しなければならない。それまでにどれだけの人が倒れることか。

（このままでは、この男まで怨霊となってしまうな）

ミタマはそう考えながら、女の子の髪を触る。すると、女の子がミタマの指を掴んできた。

（この子はどうなるのだろう。親も居ない子がどうなるのか。これも、運命と言うやつか。本社をいい加減建てろ、と言われていたしな。ちょうどいい機会か）

「長よ、この私が力を貸そう。何、どこかに別荘でも置こうと思っていた所だ。私はちょっと変わった使命を持っているが私自身は暇なのでな」

長は驚いたように顔を上げる。

「長よ。困っているのなら助けを求めろ。ここには君よりも偉いものが居るのだぞ」

そう言い、立ち上がり、長の肩に手を置く。安堵させるように。

「それにな、人というのは助けあいながら生きていくものだと、私は思っているのだよ。君だけで結論づけるものじゃない」

「あ、ありがとうございます。ありがとうございます」

感謝の言葉を言い、肩に置かれた手を両手で握る。

「ま、感謝はこのことが全て終わってからだ」

「感謝の言葉はいつ言ってもいいものですよ。では、明日にでも皆に……申し訳ありません。名前をお聞きになっていませんでしたね」

「そうであったな。私の名はヨミノタマオクリノミコト。ま、皆からはミタマと呼ばれている。そう呼んでくれ、この方が気が楽なのだよ」

「わかりました。御魂様ですね。明日の朝にでも皆に伝え、神社の建立に取り掛かりたいと思います」

「そんなに急がなくても良いからな。今は休め。でだ、私はとりあえず何処にいたらいいのだろうか」

「そうですね……向こうの山を少し登った所にお堂が有りまして、

そこからなら、ここを見渡せますし、そこの周りは動物が集まらず、何処か神聖な気配があるのです。しかし、何かが住んでいる気配はなく、不思議と思いつつも皆で掃除しておりまして、そこをお使いください」

「そうか。では、そこに居たかも知れないものには悪いが使わせてもらうとしよう」

ミタマはそう言って立つ。

「もう行かれるので」

「いや、この辺りの地理を把握しておこうかなと思ってね」

そう言って、ふと女の子の方をちらりと見る。

「この子については皆で相談しますので安心して下さい」

「そうか、ではまた明日」

そう言って立ち去るミタマに長は頭を下げていた。

＊

昼前、ミタマは里に戻ってきていた。化物の跡をずっと辿って行ったら思いの外長く、帰りは空を飛んでいったのだが迷ってしまったのだ。心配されたのでその事を正直話すと少々呆けて、

「神様でも道に迷うのですね」

そう言われてしまっていた。ミタマは返す言葉が見つからず、とりあえず、

「神とて万能じゃないのさ」

そう答えていた。

そして、今は山を登っている。しかし、ミタマの歩みは遅い。ミタマを尾行なのか追跡なのか判断しにくい追い方をしていている人がいるのだ。ミタマは相手の反応がそれ以上無く、いい加減しびれを切らし、そして、少し脅かしてやろうと思い、消えるように一瞬で高く飛んだ。その追ってきている人は驚き隠れていた木から飛び出す。その時、上からその人後ろに音もなくミタマが飛び降りた。

「まだ、叩き足りないのか」

そう尾行してきた人は、昨日の女の子だった。女の子にとっては目標の相手が急に消えたと思ったら、後ろにいて声をかけてくるのだ。ばっと振り向いて、ミタマの姿を見て、驚く。ミタマはさっきまで昨日と同じ忍者服の格好ではなく、最初に着た真白の着流しなっている。尤も、普段はこれを着ているのだが。更に猪のような面をつけているのだ。

「だ、誰！？」

「うん？ああ、私だ」

そう言いながら、面をとる。反応が薄くてがっかりしている

「これで、わかるか」

「昨日の黒いの……」

「黒いのと、きたか。間違ってはいないのだが、一応私は神なのだけどね」

「そうだ、神様。お願いがあるのです」

そう言って、ミタマの手をとった。そして、

「私を強くしてください」

ミタマの何もないと言っても良い顔を見つめて、そう言った。ミタマがその願いにどう答えるべきか、悩んでいると、

「私が私を守れるだけの力が欲しいんです」

少々俯きながらそう言った。ミタマは握られている手を握り返して、

「この手をどう感じる」

女の子は急にそう言われて、なんと答えようか考え、

「温かい、温かい手です」

そう言った。しかし、ミタマは

「これはな人も殺したことのある手だ。守れるだけの力と言っても

それは人を傷つけることになるのだぞ」

一瞬女の子のからだがびくっとするもすぐに、

「それでも、温かいことには変わりありません。それに、そんなことを言うのも私のことを考えてのことでしょう」

「……何故そのような事を言う」

「わかりません。でも、そう伝わって来ました」

「そうか……」

そう言って、ミタマは女の子の頭を撫でる。女の子はちょっと顔をしかめたけど、されるがままになっていた。

「ところで、名前を聞いてなかったな。私の名はヨミノタマオクリノミコト。ミタマで良い」

「わかりました。御魂様。私はお母さんから、木実って呼ばれてました」

「では、行くか。木実」

「はい。あ、道案内は任せてください。行ったことがありますので」

そう言って、先を行くこのみにミタマはのんびりとついて行った。

＊

お堂は確かに不思議な空気に包まれていた。動物の気配がなく、お堂の周り３ｍ程は草木がないのだ。ミタマはそのことに怪しみつつも中に何かあるのだろうかと思い。このみを下がらせ、お堂の格子扉を開けた。中は薄暗いがミタマには関係なく、その中にあるものを見つけた。そして、

「兄様……」

そう言った。中にあったのは、いや、居たのはスサノオだった。しかもこちらを背に向け寝ている

「んあ。おお、ミタマじゃないか。こんな所でなにしてんの」

「兄様こそ何しているんですか」

「何って、寝てる」

ミタマは眉をしかめるような動作をする。尤も、したって顔に変化は無いのだが。

「ま、いいです。それより、ここは兄様の物なんですか」

「そうだな。出雲から遠すぎず近すぎず、程よい距離だったんで、見つかる可能性も低いし、安眠所として使ってる」

「そうですか。ちなみに私ここに、本拠地を置くことにしました。で、それが出来上がるまでの場所としてここを譲って欲しいんですが」

「おお、ようやくか。まあ、いいだろ。譲ってやるよ」

「すみません、兄様」

「何、親愛なる弟のためよ。（ミタマがここにいれば堂々とここで休めるしな）」

などと、気前よく譲ったものの本心は自分の為であった。

「ところで、後ろのちびっ子はなんだ」

そう言われて、ミタマが振り向くと、すぐ後ろにこのみが来ていた。

「ああ、怯えなくていいから、こんな凶暴そうな顔してるけど私の兄ですから。これから、顔を見ることもあります、挨拶しなさい」

「は、はい。木実と申します。これから、ミタマ様に修行をつけてもらうことになりました。よろしくお願いします」

「このみ、ね。いい名前だ。俺の名はスサノオ。よろしくな」

スサノオがそう言って、にかっと笑うと、このみはミタマの後ろに隠れてしまった。その事にスサノオは肩をすくめ、ミタマは首を傾げた。

「まあ、いいさ。所で、ミタマよ、その子な能力持ちだ。しかも、中々面白い。強くなると思うぜ」

「……教えてくれないのですか」

「こういうのは、自分で気づくものさ。さてと、俺は行くとするわ。ここ、自由に使っていいしな」

「はい、では、また会う時まで」

「ああ、じゃあな」

そう言って手を振りながら、スサノオは去っていった。

そして、入れ違いになるように、里へと続く道から人の足音が聞こえてきた。ミタマはその事に気づき、外で待つ、このみはお堂の中だ。

「あ、御魂様。昨日はありがとうございます」

里の者なのだろう。ミタマを見るなりそう言って来た。

「ま、気まぐれだったものだ。そこまで、感謝しなくても良い。所で何か用があったのではないか」

「ああ、そうです。ここに昨日の子来てませんか」

「来とるよ。おおい、出てきたらどうだ」

そう言っても、このみは格子扉を少し開けて、顔を出すだけで出てこようとしない。

「ふむ。ま、あの子は何でも強くなりたいそうだ。それで私が預か

ることにした。まずかったか」

「いえ。そんなことはないと思います。それでは、皆には御魂様の所に居るとそう言っておきます」

「すまんな。よろしく頼む」

「それでは失礼します」

そう言って男は道を戻っていった。ミタマは、

（ま、おいおい、話してくれればいいさ。私には時間が余るほどあるからな）

そのようなことを考えながらお堂に戻っていった。

真っ黒、人と共に（後書き）

名前がカタカナは神にしかしっかりと発音できないっていう設定的な……最初から漢字にしとけばよかったです。はい。

真っ黒、変わった妖怪と出会う（前書き）

遅くなってすみません。

風邪なんかやはり引くものじゃありませんね。皆さんもお気をつけ下さい

真っ黒、変わった妖怪と出会う

あれより数十年が経ち、ミタマは出雲へ歩きながら向かっていた。今はその道中の手入れされていない小屋のようなもので休んでいた。

後どれくらいだ、と考えている時、森からがさがさと動く音がしたので外に出る。すると、

「……強くなりすぎだ」

そう言って、呆れているミタマの前には、血に濡れた様子のない木の実とぐったりとした熊がいた。歩いているのは木実と共に向かっているからだ

「御魂様、見てください。素手で殺ったんですよ。今日は熊肉ですね」

「莫迦、そいつは鬼熊。年を経て熊が妖怪になったものだ。とても食えたもんじゃない」

「えーそうなんですか。残念です」

木実はそう言ってしょんぼりと肩を落とした。木実はミタマより才能があったようでメキメキと実力をつけ、修行してすぐに自身の能力を開眼させていた。

“強化と転換を操る程度の能力”

非常に強力な能力である。しかし、木実の場合どれだけ成長して

も自分限定でその効果が外に出ることはない。だが、木実はこの能力をすでに使いこなし、半不老不死となっている。人間というのは生命力が減るごとに死に近づく、しかし、木実はそれを減らさないように能力で補い保ち続けている。だから、致命傷を負えば死んでしまうので不老不死でないのだ。

生命力を強化すればいいのではとミタマが聞いたが、強化はその時だけ爆発的に増えるだけでむしろ良くなくなる。そして、何故長生きしたいのだと聞いたら、

「御魂様に仕えることができなくなってしまうではないですか」

そう面と向き合って答えられ、ミタマは何とも小っ恥ずかしい気持ちになってしまった。更に、

「死んで霊体になっても、いいのですが。やっぱり生身の方がいいですから。直接ミタマ様に触れることができますから」

そう言い切った。ちなみに会った当初男性を避けていたのは、あの日起きたら里の数人から下卑た目で見られ、非常に怖い思いをしたから。ミタマはそのような感じはなく、最初に感じたのが優しいものだったから安心したからであった。スサノオを怖がったのは単純にその体が大きかったから、びっくりしたのだ。しかし、今ではもう慣れているようだ。

ミタマの神社は中々立派な物が出来上がった。何故なら、暇を持て余した神々が暇つぶしにと支援した結果だ。木実まで気に入られあげく里の者から神格化されており、軍神や狩猟神のように崇められている。アマテラスら真面目な神が生き続ける現人神ってどういうなんだ、と頭を悩ましたりしているのだが、本人はその事を知ら

ない。ついでに木実はあくまで現人神であるので神名はついていない。

いろいろな神がよく訪れるものだから、自然とこの土地の力が増し、ここを治めていた所から何があったと問い詰められたのだが、その時は上手いこと長が言いくるめていた。

そして、神社の管理は長の一族がすることになっている。どうにも長の一族は能力とまではいかないが霊力が高いものが多い。今では三代目となっており、特にミタマを慕っている。三代目が小さい時に勝手に山の中に入り、妖怪に襲われそうになったのだが、ミタマに助けられたということがあったのだ。それから、自分も鍛えてくださいとミタマに言い、宮司でありながら、武道の達人となった。さすがに木実に勝てていないし、能力有りだと尚更だ。しかし、この時代の人の身では最高峰だろう。棒術を基本にしており、時間があれば里の者に護身として教えたりしている。

更にスサノオが一代目と話し、里の名を実森とし、長の一族を実木とした。これはミタマが死に関わる神だから、その地に死が訪れずれ易くなる可能性があるので、実つまり命を多く宿す土地という名前をつけることでバランスを取ろうとした結果だ。

＊

ミタマが出雲へ行っている神無月の時期、三代目実木は日課である鍛錬を終わり、教えに行くついでに農作業でも手伝おうかと考え、準備している時、里を妖気が覆った。この里は神々が力を与えてしまったが、決して大きくはないのだ。しかし、その恩恵により、里

に危害を加えようとする妖怪など邪な存在は打ち消してしまう効果があった。それなのに、妖気を感じるというのはあり得ないことだった。

三代目は鍛錬していた服に着替えなおして、三代目にと一柱がもたらした神珍鉄製の万能棒を持ち――本来は木実に渡す物の試作品なのだった。今回木実も出雲に行っているのはその完成品が出来たからだった――駆けていく

「全員、中に入ってろ！私が対処する！」

そう叫びながら里の中を駆ける。三代目が来たことで慌てていた住民たちは少し安心したようだが、逃げるように家の中に入っていく。

「三代目、手伝ったほうがいいか」

三代目の横や後ろに男たちが集まってくる。歳は三代目より上の者も下の者もいるようだ。手には三代目の様に綺麗に整えた棒や農具を持っている。

「いや、腕に自信のない人は隠れてろ。この妖気は、」

続きを言おうとした三代目の前にこの時代の女性の貴族のような服装なのだが、そのままではなく簡単で、色彩鮮やかな物になっている。髪は結わずそのまま垂らしている。

「はあい、こんにちは」

「やばい」

余裕を持って優雅に手を振る女性の妖怪に対し、三代目はそう言った。

＊

三代目は自分の実力を過信していた。何しろ、この里の周りでは三代目に勝てる妖怪などいなかったのだ。もちろん、ミタマや木実には勝てはしないがそれ以外は負け知らずだったのだ。だが、今の状況は無様に万能棒を支えにして、片膝をついている。他の者は皆倒れている。

「な、何のようで、ここに来た」

「……今から死にゆく者にしる必要はあるの？」

「知ってから死ぬほうが、怨念にならないだろ」

「知ったこそ怨念になるんじゃないの？。まあいいわ、ここに、とても強いのがいるんでしょう。あなたも十分強かったけれど、件の人物はこの程度じゃないんでしょう。安心なさいな、あなた達は殺しはしないから、私って人を食べなくてもいい妖怪なのよね」

「……一矢報いる事無く倒されてしまってはあの方に合わす顔がない！」

三代目は手の内側に小さく隠しておいた万能棒を女妖怪に向けて投擲した。しかし、それは女妖怪に当たる手前で裂け目のようなも

のができ、そこに吸い込まれていった。

「私でもこの武器は痛かったからねえ」

そういう女妖怪は手のひらに裂け目を作り、そこから万能棒を出している。

「あなたも面白かったわ。それじゃ、待たせてもらうわね」

そう言って歩を進める女妖怪の前に影ができる。

「その必要はない」

ミタマは三代目を庇うように前に降り立った。

「御魂様、申し訳ありません。妖怪にここまでさせてしまうとは」

「……気にするな、傷は皆深くないようだな」

「はあい、あなたが件の奴ね。あんまり妖力高くないようだけど、本当に強いの？それより、なんで妖怪が人間と一緒に居るの？」

女妖怪がミタマと実木の会話を遮るようにそう言った。女妖怪が言った通りミタマは今神力が回復しておらず妖力が神力を上回っている状態だった。何故なら、ミタマは毎年の出雲で戦いの格を持つ神に稽古をつけられているからだ。それが、今回はこの里に危機が迫っていることに気づき、休みを取らず戻ってきたのだ。

そして、その事に対しミタマが返事をしようとしたら、女妖怪が、

「まあいいわ……あら、あなたおもしろいわね、死の妖怪？いや、魂の妖怪なのかしら。一体どれだけの数の魂を喰らってきたのかしら」

そう言った。すると、周りの空気が変わる。しかし、そのことに女妖怪は気づいていない。ミタマを調べることに夢中になっているようだ。ミタマから感じる妖気の量から、そこまで強くないと思っているのだろう。しかし、それは違う、そう感じてしまうのは神力が妖力を外に出さないように覆っているからであり、今はそれが薄くなり、妖気が外に漏れ出しているからだ。ミタマは自分が妖怪であったことを里の者に伝えているので、その事に対する動揺はないのだが。

「おい、勝手に詮索するのはあまり良い事とは言えないぞ」

ミタマがそう言うも、女妖怪は気にせず続けて、

「あら、あなた人間だったの」

そう言った、その瞬間辺りに凄まじい圧力がかかる。ミタマが内包されている妖気を全て解放したのだ。耐性のある者でもこれを耐えるのは至難であろう。

「な、何なの、あなた」

ミタマは女妖怪にゆっくりと近づく、女妖怪は動かずミタマの接近を許した。そして、ミタマは女妖怪の首に手を添える。

「女、何処まで見た」

ミタマの質問に対し、女妖怪は答えない。いや、答えることができない。自分を超える存在を目の当たりに首に手を置かれ、その質問に対しどう答えれば生き延びることができるのかという考えが頭の中を飛び回っているのだろう。

「私を記憶を見たのか？それで、何を見た。どう感じた。まさか侮蔑したわけではないよな」

ミタマがこうなってから最後を看取ったもの達にミタマは誇りであり、尊敬、感謝をしなければならないと思っているのだ。ミタマが最後を看取ったものは皆全員ミタマを慕っているものばかり。そのことにミタマは自分がどのような存在であるかわかっているからこそ、そのように感じてるのだ。そのことを知らずともミタマにとって最高の記憶を勝手に覗かれたのだ。その怒りたるやミタマが今どのような状況かわからないほど激昂している。

「まあいい、ゆっくりと苦しみながら死に行け」

ミタマはそう言うと、手に力を入れ、長らく封じてきた化物としての能力を発動させる。自分の事を慕っていない者の魂を吸っているのだ。

女妖怪はその美しい体が徐々に崩れていくのを今まで感じたことのないような恐怖を感じ、そして、ミタマの行動に対し反撃することが出来なかった。動こうと思っても、体の言うこと聞かなくなっているのだ。

「御魂様！お止め下さい！その力は以前話していただいた物ではないのですか。それに妖気を解放しないでください。皆が怯えております」

三代目が決死の覚悟でそう言うとミタマは、

「……そうであるな。私が決めたことを私が破るわけには行かないよな。皆怯えさせてしまってすまない」

そう言いながら、女妖怪の首から手を離した。

「女、すまんな。今返す」

そう言うと、肩に手を置いた。すると、見る見るうちに元通りになっていった。そのことに女妖怪は咳き込み、体のあちこちを触っている。

「女、また戦いたいのならば、直接向こうの神社に来い。もちろん、今回のように妖気を撒き散らしながら来るなよ」

「ちょ、ちょっと御魂様何言っているのですか。妖怪を入れるなど」

「何を言うか、私は一度も妖怪が入ってはいけないと言った覚えはないぞ。それに、妖怪全てが人間に対し悪と言う訳でもあるまい。そうでなければ、私という存在が許されないではないか」

「むう、そうですね。では、これからはもっと話を聞くように善処します」

「私はお前のそう言う所は好きだぞ。あー、女、ではな。また会う時を楽しみにしている」

そう言って、後ろを向き、手を振って去っていった。三代目は皆

を起こしながら、まだ呆然としている女妖怪に対し、

「負けた私が言うのも何だが、御魂様が来いと言ったのだから絶対に来いよ」

そう話しかけた。それでようやく目を覚ましたのか、女妖怪は

「ええ、そうね。そうさせてもらうわ」

そう返したのだった。

＊

あれから数日が経ち、ミタマは久しぶりにゆっくりとした日々を送っていたのだが、謀ったようにちょうど木実が帰ってきたのと同時に件の女妖怪が現れて、三人でお茶を飲んでいたのだが口喧嘩が始まり、殴り合いの喧嘩に発展した。

「ああ、私の平穏な日々が消えて行く気がする」

ミタマはそうぼやく。

「御魂様……とりあえずお茶持ってきますね」

三代目は慰める言葉が見つからずひっくり返った机を直しながら、そう言った。

「ああ、濃いのを頼む」

ミタマはため息をつきつつ、木実と女妖怪の戦いを見ている。その戦いは殺しあいと言う訳ではなく、木実が女妖怪に対し、ミタマと戦うなら私と戦えと言ったからだ。

「優位に進めているのは木実のようだが、あの妖怪は基本遠距離で戦うのを好む方だな。いや、自身の能力を使って戦う方だな」

「兄様ですか。気配を消して来るのは止めて下さい」

ミタマはそう言うも目線は戦いから離してはいない。白熱して致命傷を負うような一手が出る前に止めれるように構えているのだろう。

「これは、スサノオ様もお見えになられていたのですか。只今お茶を用意致します」

「すまんな」

そう言い、腰を下ろす。

「ミタマ。妖気を解放したそうだな」

その質問にミタマは答えようとしない。

「いや、悪いと言う訳ではないのだよ。ただ、これを機に妖気を完全になくしてはどうだ。妖気を使うと本能で戦うようになってしまう。お前にとって辛いのではないかと思ってね」

「できるのですか……？」

「お前ができると信じればできないことはないだろ。まあ、もう神と認識されているから、消えることはないだろ」

「……折を見て試してみます」

「ああ、そうするといい」

それきり会話はなく、二柱とも茶を飲みつつ戦いを眺めていた。

戦いは木実が女妖怪の両手を弾き、喉元へ強烈な突きを入れた。女妖怪は人間の形を取っているが故に悶えている。もし本来の姿だったら違ったのかも知れないが。

「ミタマ様、見ていて下さいましたか。勝ちましたよ。あれ、スサノオ様いつの間に入らしたのですか？」

「つい先程だな。なかなか、扱いが上手くなったじゃないか」

「はい。ありがとうございます。須佐之男様お手合わせお願いできませんか」

「元気なことだ。いつもそのままであれよ」

そう言って木実の頭を撫でて外へ出る。木実は楽しそうについて行った。

「あー。疲れたわ。何なのあの人間」

「ふふ、私の自慢の子だよ。ま、何にせよ木実に勝てなきゃ私に勝

てないぞ。次には遠距離も有りでやってみるといい。今回よりは楽しめるだろう」

「そう。じゃあ、そうさせてもらうわ」

「ま、上がって茶でも飲むといい。あれでも見ながらな」

ミタマは下がらせていた三代目を呼び、最初にこぼれた女妖怪の分のを用意させる。

「ああ、そう言えば名を聞いてなかったな。私の名はヨミノタマオクリノミコト。親しいものからはミタマと呼ばれているが、ほぼこちらばかりで呼ばれているから、そう呼んでくれ」

「……私は八雲、紫」

「おいおい、最初の黙りは何だよ？」

「いえ、ただ本当に神だったとわかって驚いているのよ」

「ま、無理もない。私自身そのような振る舞いをしないし、体の色や顔だってこんなのだ」

そう言って、袖を捲り上げ、面を外す。そのことに紫は何も言わない。

「その上、元妖怪と来たもんだ。ま、今も妖力はあるんだけどね。母様を始め、あの方々には感謝しきれないよ」

「その母様とは誰か聞いてもいいかしら？」

「話しても困られる方では無いしいいだろう。イザナミ様だよ、イザナミ様」

「はあ！伊邪那美って、あの伊邪那美！？」

「おや、知っているのかい。ま、八雲の言う伊邪那美が私の知っている母様と一緒ならの話だがね。それにあそこで木実と戦っているのはスサノオ様だよ。私は兄様と呼ばしてもらっているけどね」

ミタマがそう言うと紫は持っていた湯呑み落としそうになるが、何とか掴み直した。

「おいおい、落とさないでくれよ。それ、気に入っているんだ。それに何を驚いている。君は兄様とは何も関係無いだろう」

「いや、あの、もうそろそろお暇いたしますわ」

そう言っていそいそと立ち上がり、去ろうとする。しかし、その肩をスサノオが掴む。

「まあ、座れや」

スサノオは紫に座るように勧め、自分も座る。木実はスサノオが急に消えたので辺りをきょろきょろと見渡している

「兄様どうしたのです？」

「はあ、ミタマよ。もう少し学を身に付けろ。いいか、こいつの名は八雲紫といったろ。八雲ってのは俺が最初に言った言葉で出雲の

方を指す言葉だ。そうだ、お前は見たところ境界を操る能力をもっているだろう」

「……ええ、その通りです」

「やはりな、あの土地はヤツカに頼んで外から引き寄せてきたもの。さらにあの場所は神が集まる場所となっている。紫は縁の色から来ていて、縁ってのは因縁やら周縁って意味を持っているからな。そしてその色は高貴なものが好む色。つまり八雲紫は自分の能力を高め、且つ神のような存在と認識されるためってところか」

スサノオが言ったことに紫は何も返そうとしない。

「ほう。そのような意味が。ふむ、私に足りないのはやはり知識の量ですね。今一度学び直してみましょうかね」

「まあ、そんなことはどうでもいい。おい、紫」

「な、何でしょうか」

「俺とやらないか」

そう言ってスサノオは親指を人差し指と中指の間に挟んで突き出す。急にそんな事言われたものだから紫は硬直している。ミタマは呆れつつ、

「兄様、確か八意に夜這い仕掛けて不能になる薬をぶっ掛けられたそうじゃないですか」

そう言った。その件は八意は事前にオモイカネにスサノオについ

て話を聞いていたので、もしもの時にと枕側にその薬を置いていて難を逃れたのだ。

「おい、何でその事知っているんだ！しかし、あれはすぐに元に戻ったからな、もう大丈夫だ」

「……土下座したそうじゃないですか」

ミタマは蔑むように顔を斜めに上げる。スサノオはミタマに心を開いているから、ミタマが今どのような感情かまるわかりになっているのだ。そして、スサノオは自分の前に置いていた湯のみをミタマに向け放り投げ、次に身を乗り出し拳を振るう。しかし、ミタマは湯のみを避け、机の足を掴み持ち上げ防いだ。そして、机は当たった所から真っ二つに割れた。

「ミタマ表出ろ！またぶちのめしてやる」

「はっ！いつまでも勝てると思わないことですね」

そう言って二柱共外へ出ていく。そして、その戦いに木実まで混ざり混沌とし始めた。

その音に気づき三代目が駆け付けるも、部屋の中と外の状況に一瞬呆然としたものの、先ほどのちゃぶ台返しの影響で茶がかかっている紫を見て

「ああー、拭くもの持ってきますね」

そう紫に話しかけた。

「……大丈夫よ」

紫は話しかけられたことでようやく動き始め、そして、宙に浮く裂け目のから布を取り出した。

「それ便利ですね。あ、今日は泊まってかれるのですか？」

紫そう聞かれて三代目の方を勢い良く向き、もし泊まったらどうなるかと考え、そして、なぜこんなにも馴れ馴れしくなっているのだろうかと三代目を疑問に思うも、結局は考えるのを放棄して、ただ、

「帰ります」

そう言ったのであった。

結局所ミタマに平穏は訪れはしないのだろう。ミタマ自身がこのような性格をして、周りも好戦的な性格の者が多いのだから。

戦いはスサノオが本気の一撃を放とうとした所をミタマが全力で抑え、そして、ミタマは倒れたものの防がれたことに驚き、隙の出来たスサノオの急所に容赦のない一撃が入り、今回は木実の勝ちとなった。

ちなみに紫はその後何度もスサノオにおもしろ半分に追いかけられ、悲惨な目にあったとか何とか。

真っ黒、天狗を知る

「ミタマ。こっちよー」

ミタマは今、黄泉国の中に居た。ちなみに木実は来ていない。いくら力が強くなろうとも、生きてこの地に来ることは不可能だからだ。

そして、イザナミは寝転がり八雷神に按摩させたり、団扇で扇がせたりしている。この様な事を出来るのはイザナミだけであろう。

「ありがと」

そう言って、八雷神を下がらせミタマと向かい合う。その場には側に控えていた残りの八雷神が机やお茶を用意していた。

「よく来てくれたわね。今回はどれくらい居るの？」

「そうですね。今の当主は中々優秀ですし、木実にも補佐するように頼んでありますし、当分は大丈夫でしょう」

「あら、そう。なら暇なのよね。ちょっと頼みごと引き受けてくれる？」

「それは、勿論」

「最近、都の近くの山の私を祀る神社で、守護に任じられた天狗が居るのよ。それで、その子がどんな子なのか見て来てくれない」

「それは、いいのですが、見てくるだけでよろしいのですか」
「そうね、別に戦ってもいいわ。ただし、人に被害は出さないこと」
「わかりました」
ミタマはそう頷き、後は談話したり、知り合いに会いに行ったり、余裕があるまで黄泉国に居続けていた。

＊

ミタマは山を登っている。勿論イザナミに頼まれた用事を行うためにだ。飛んで行かないのは件の山があまりにも都に近いから。都には陰陽師など力のあるものが多数いるのであまり騒ぎを起こしたくないのだろう。ミタマは更に自分の力をほぼ漏らさないようにしているので、今のミタマはその姿を見たとしても何者なのかわからない状態になっている。その上、服装はこの時代にできるだけ合いつつ、肌が見えないようにしっかりとした物を着て、手袋と面をつけていた。
そして、山の中腹あたり、ミタマは風に煽られ、目の前に人が現れた。
「ここは天狗の領域です。何者かはわかりませんがお帰りください」
天狗である。種類は烏天狗なのだろうか、大天狗と分類するには少し小さいが鼻先は尖っておらず、人間のものだ。

「参拝しにきただけさ」

「参拝なら参道をお通りください。最近人が手を入れたものがありますので」

「私のようなものが人の道を通れと、それは些か難しい物があるのだけど」

そう言って、ミタマは手袋と面を外した。天狗の目が狭まる。今のミタマは自分の力を漏らさないように抑えているのだが、その事を忘れているのであろうか、それとも単純にからかっているのか

「ま、私はそこで祀られている神様より、守護を任じられている者に用があるのだけどね。ま、理由は」

後者であろう。ミタマが先を言おうとしたが、天狗は守護という言葉に反応するように、剣を抜き、ミタマに剣先を向けた。

「これ以上登るのなら敵と認識します」

「話は聞いたほうがいいと思うけどね」

ミタマがそう言って一歩前に出すと、天狗の姿がぶれる。一瞬で距離を詰め、剣を突き刺そうとする。しかし、ミタマは半身にして剣を避け、手を手刀にして、天狗の喉に突きつけ、触れる。

「私はもっと速い者を知っているよ。この程度ではまだまだ」

ミタマがそう言うと、再び天狗の姿がぶれる。しかし、ミタマはその姿を追っているようで、しきりにその場で体を動かし、何度も

躱す。

ミタマはそれに飽きてきたのかため息をつき、

「森の中では勝手が違うだろ。上へ行かないか」

そう言った。天狗はそれに反応するように立ち止まり、ミタマを睨む。それにミタマは肩をすくめ、

「慣れている方が君の力が十全に発揮されるだろう。そのほうが面白い」

そう言って、先に空に上がっていく。少し遅れて、ミタマを追いかけるように天狗も空に上がる。

「追いかけっこでもするかい」

ミタマは相変わらず天狗に対して挑発を続ける。最近暇続きであったので楽しむ気のようだ。尤も天狗にとっては鬱陶しい事この上ないが。

天狗に合わせるように少し後ろをミタマが駆ける。天狗はそれに気づき、さらに速度を上げる。しかし、ミタマは悠々と追いかける。だんだんいらついてきたのか天狗がミタマのいる方向へ剣を振るった。だが、ミタマはその剣を掴み、天狗ごと引き寄せ、もう片方の手で殴る。手加減はしているようだが、少し苦しそうにしている。

「剣を振るうのなら隙を見つけないと。それに今のだと負けを認めたことにならないかい。いや、君も中々速かったよ、おそらく君達の中でも速い方でしょ。ま、今戦ってるけどさ、私は別に戦いに来

たわけじゃないんだよ。ただ、見てこいって言われてさ、頼むよ」

天狗はミタマを見定める様に見て、これ以上戦っても仕方が無いと判断したのか、

「わかりました。案内します」

「ありがとうね。ああ、そうだ君の名前は」

「……射命丸言います」

「そうか、射命丸よろしく頼むわ」

そう言って、射命丸を先頭にして、山の山頂に向けて飛んで行った。

道中射命丸と名乗った天狗はミタマに話を聞いていきた。

「私だけ名乗るのは不公平です。そもそもあなたは何者なんです？」

「正体は……ま、後で知ったほうが面白いでしょ。名前はミタマでいいさ」

「で、ミタマは何でこの山登っているのですか」

「さっき言った通り、この山にある神社の守護を任じられている大天狗に用があるのさ。もう着くんじゃないかい、気配が強くなってきたけど」

ミタマがそう言うと、射命丸は目線を前に向ける。そして、降り

て行くと、藪が道を作るように割れ、そこから洞穴が現れた。そこを射命丸は何事もなかったかのように歩いて行くが、ミタマは面白いものを見たかのように辺りを見渡しながら歩いて行く。少し進むと上は空が見える一際大きい空間が現れ、そこで、射命丸が、

「太郎坊様、太郎坊様に会いたいと言う者がやって来ました。この者得体の知れぬ気配を発しておりましたので先に何か有ってはまずいと思い此処に連れて来た次第でございます。どうか会ってもらえませんか」

そう言うと、空間に一陣の風が吹き上の裂け目から、人よりも何倍も大きい者が降りてきた。その姿を上の者に立つ威勢を持つ、後の世では八大天狗と呼ばれる、愛宕山太郎坊その者であった。

射命丸は頭を下げ、言葉を待っているが、待てど言葉をかけてもらえず何故かと訝しかみ、ふと横に目を向けるとミタマが直立不動で顔を大天狗に向けているではないか、そのことに驚き注意しようとしたが、先に大天狗が、

「射命丸、ちと下がっていろ」

そう言われ、納得してはいないものの天狗とは基本組織的であるもの達であるから、射命丸は何も言わず素直に下がって行った。

射命丸の姿が見えなくなったのを確認したのか、大天狗の姿が縮んで、ついには人並みの大きさになった。更に先ほどと打って変わって威圧感は鳴りを潜め、佇んでいる。

「ほう、気づいたか」

「これに気付かなければ頭なんぞやってられませんから」

大天狗、太郎坊はミタマが徹底的に抑えていた神気を気づいていた。そして、そのような事をするには内密な理由でもあるのかと思い、射命丸を下がらせていたのだ。

「それで何用ですか」

「君は自分の立場がどのようなものか知っているかい。いや、そうなったことを咎めるのではないよ。人間がやったことなんだからね。それで、私の名なんだが、ヨミノタマオクリノミコトって言うんだが、わかるかい？」

「イザナミ様関係ということですか……」

「そう。それで、私がイザナミ様より、君がどのような者か見てこいと言われてやって来たということさ」

「それで俺はどうなのですか」

「そこなんだよ、こんな話し合いでわかるわけ無いだろ。だから、探るように正体を隠して来たわけなんだけど、わかったみたいだしね。何かいい案はあるかい」

「……手合わせはいかかでしょう」

「ふふ、君が戦いたいんじゃないのかい。最初は抑えた気がまた大きくなっているよ」

「しかたがないでしょう。俺は些か強くなりすぎた。この山で俺に

勝てる者はもういない。俺はいい勝負がしたいのですよ。心の底が滾るような熱い戦いを」

（天狗は組織的と聞いたが、こいつは兄様に似ているな。いや、日本にいる天狗は大陸から渡ってきた者もいるが、天狗の頂点に立つものは兄様から産まれた者の子と聞くし、目の前のこいつはその系統なのだろうな）

事実天狗たちの長とされる天魔雄命とはスサノオの猛気から産まれたとされる天逆毎の子である。この天逆毎はとてつもなく凶暴で、ミタマと接している時はそのような面を出していないが、スサノオの悪の面の象徴と言われる存在である。

「いいとも、私も最近体を動かしていないのでね、ここらで動かしたいと思っていたところだ」

ミタマに聞くと素直に頷きはしないだろうが、好戦的な性格をしているのだ。ただ、死を伴う戦いは好きではなく、互いが全力を出しあった結果で勝敗を決めたいと思ってはいるようだが。勿論普段はそのようなことを口には出さないし、木実と行動を共にしてからは更になくなっている。

「しかしな、私達が暴れると下の者に被害が出てしまう、私はあまり関係のない被害は出したくない質でね。どうする？」

「俺の配下の者に結界を張らせましょう。何、皆が全力を出せばこの戦いにおける下への被害はでないでしょう」

「では外に向うか。此処では狭すぎる」

「はい。では、俺は皆に伝えてくるので」

そう言って、洞窟の外に楽しそうに飛び出していく太郎坊を見て、ミタマに心をひらいている者ならわかるだろうが、実に楽しそうに上の裂け目から外に出た。

＊

「あら、そこは本来の大きさじゃないのかい」

「あの姿なんてただの的ですから」

「そりゃそうだ」

ミタマと太郎坊は数メートル空けて相対している。ミタマはさきほどと同じ服装で仮面もつけている。対する太郎坊はミタマが言った通り本来の大天狗の大きさでなく人間の大きさを取っている。しかし、顔は射命丸と違って立派な鼻となっている。そして、手には葉団扇を持ち、いつでも動けるようにしている。

「勝敗はどう決める？」

「殺さず、負けを認めるまで」

太郎坊がそう言うと、ミタマは頷き、抑えていた力を開放し、能力による強化を発動させる。下で結界を張っている天狗たちはこのミタマが発する神気に思わず、身を縮めてしまったほどだ。しかし、太郎坊はミタマの神気を感じ取り、歓喜で身を震わしている。

「いい、凄くいい。ああ、これこそ待ち焦がれた闘争！これが終わったら是非兄貴と呼ばせてくれ」

「好きに呼ぶといいさ。お前も私を満足させてくれよ」

ミタマの言葉に答える様に太郎坊はその手に持った葉団扇を振るう。発生した太郎坊の妖力を伴った風は大きな火風となりミタマを襲う。それにミタマは動じずそのまま受ける。そして、何事もないようにそこから少し前に出て、

「ぬるい。私を傷つけたいのならこれぐらい見せろ」

そう言い手を手刀にし、上から振り下ろす。すると、その軌跡を沿うように神力の塊となって太郎坊に向かって飛び出していく。太郎坊もそれに敢えて受けようとする。しかし、その力の大きさに思わず顔を守るように両腕を前に出した。

「ぬうっ！」

その防いだ腕から血が吹き出る。しかし、その事に気を取られている暇はないようだ。ミタマはすでに太郎坊の前にいる。だが、そこは天狗、ミタマが動くときに発生している風により、いることは気づいている。

「天狗倒し！」

太郎坊がそう叫ぶとミタマと太郎坊の間に妖力で出来た大木が出来上がる。そして、ミタマ目掛けて倒れていった。勿論ミタマはこれを避け、前にいる太郎坊の姿を確認しようとする。しかし、そこ

に太郎坊は存在せず

「天狗笑い」

その声が何処からともなく聞こえ、次には笑い声が聞こえてきた。さらに

「天狗礫」

その声と共に上空から大岩が何個も落ちてくる。更にその二つを併用しつつ太郎坊は突撃を繰り返す。ミタマは何発かもらった。その速さは射命丸と比べるなどおこがましい程だ。

ミタマは太郎坊を見つけるのを諦め、思い出したかのように両手を合わせ、拍手を打つように手を打ち鳴らす。拍手には邪気を祓う効果もあるとされる。それに神力を重ね、衝撃波として撃ち出す。邪気を祓う神力の衝撃波により大岩は掻き消され、更に隠れていた太郎坊に傷を負わせ姿を出させる。その姿はぼろぼろとなっていた、近くに居たのだろう。勿論下にいる天狗たちに配慮なんかしていないが比較的距離が開いていたようで、何人かはそこまで傷を負ってはないが、気絶しているのが多数いる。

「ああ、私のせいで結界が薄れてしまったな。次で決めるか？」

「そうしてもらいたい。まったく。俺はこんなにも自惚れていたのだな。鍛え直しだ」

そう言って、ミタマの接近を甘んじて受け入れざる負えないほど太郎坊は傷を負っていた。

「全力でやってくれ。受けてみたい」

「いいだろう。ただし、殺しはしないがな」

正拳突き、基本にしてその威力は達人となると絶大なものとなる。ミタマはそれをほぼ納得の行くものにして、さらに神力を乗せたものである。太郎坊は残っている妖力を全て防御に回したにも関わらず、打ち破れ、血反吐を吐きながら落ちていった。

「……しまった。やりすぎたか？」

そう言って太郎坊を追いかけて行くミタマであった。

＊

「兄貴！飲んでますか！？」

「ああ、飲んでるよ。しかしな、私はゆっくり飲むほうがすきなんだよ……」

「そうですか。おい！野郎ども飲んでるか！」

「おおー！」

そう言って太郎坊は大勢いる所に飛び込んで行った。

あの決闘の後太郎坊は少しの眠りの後、ミタマの心配を他所に何とも無いように起き上がってきた。そして、第一声に宴会だと叫ん

だのであった。ミタマこの時油断していた。天狗がうわばみであるということを知らなかったのだ。

唯一の救いは隣で酌をしている射命丸があまり酔っていないということである。射命丸が其処に居るのは太郎坊が知っている者からのほうが気が楽だろうと言っての配置だった。尤も射命丸もそこに居るのは好んでのことだった。

「射命丸、此処にいないで、向こうへ行ったらどうだ？」

「いえ、私ってあまり皆と一緒に動くのあまり好きじゃないんですよ」

そう言って、ミタマの空になった盃に注ごうとするので、ミタマは手を杯の上に出し制す。

「変わり者なのだな」

「上があのような方ですし。許されるのです」

そう言って、太郎坊の方を向く。そこには酔いが回って、もう乱痴気騒ぎとなっている有様だった。

「ふふふ、そうか。しかし、息苦しいのは違いないだろ」

それに射命丸は返事しない。そして、なぜこのようなことを言うのかという目線を送る。

「お前と同じ変わり者の妖怪が居る。名を八雲紫と言う。機会があったら探してみると良い。太郎坊なら、許すだろう」

「八雲紫ですね……考えておきます」

ミタマは自分で銚子を持ち、逆に空になっている射命丸の盃に注いだ。その後は太郎坊達の乱痴気騒ぎから外れたもの達を含めて、何気ない日常的なことを話しながら時が過ぎていった。

＊

時は流れて数十年から数百年、ミタマは神社の屋根で夏の星空を肴に酒を飲んでいた。起きている理由は何やら胸騒ぎがしたからであった。

そして、それに答える様に突然あたりの風が強くなる。そして、暗闇を裂くように一つの人影が現われる。

「ミタマ様申し訳ありません。力をお貸しください」

射命丸である。本来は暗くてよく見えないだろうが、ミタマには射命丸の顔が切羽詰まっているのがわかった。ミタマは酒を放り出し、木実を呼ぼうとすると、

「下におります、ミタマ様。この地はお任せ下さい」

射命丸の妖気を察して、既に下の庭に待機していた。

「相変わらず、優秀すぎるな。まったく、頼んだぞ。射命丸、私を連れて行きたい所で連れて行け」

そう言って飛び立つ。その速度は前回会った時とは段違いの速度を出している。

「ありがとうございます」

「礼はいい。何が起こった」

「私たちの長と鞍馬山僧正坊様が都上空で争っております」

これにはミタマも驚いた。二人共八大天狗のと呼ばれる天狗であり、その中でも強大なのな者である。鞍馬山の大天狗は後の世でありの源義経に剣技を教えたとされる天狗である。今は人間に与えられた格を全うしようとしている、人間にとって良い天狗と象徴とも言える存在であった。

「更に、この争いの余波で都が大火事に見舞われております」

「都が火事だと！あの阿呆共が！今の都で死人がたくさん出てみろ。怨霊となって、終いに国中を覆う祟りと化すぞ」

射命丸はそのミタマの怒気に圧倒されつつも、更に続ける。しかし、射命丸は後にこれは後で言うべきだったと言っている。

「原因は現白峯相模坊様が恨みにより天狗となった崇徳天皇の祟りを抑えるという名目で勝手に山を移ったことにより、元いた地方と移った地方の力関係をどうするかという議題を酒の席で行なっている所、白熱してしまい。この次第で有ります」

「……移った理由は本当にそれだけか」

「相模坊様は女性の天狗でありまして、崇徳天皇のあの暗い影に一目惚れしたとか」

「当の本人は今何処に」

「その、この事は知らないかと。ひい！」

ミタマから発せられる今まで感じたことのないような威圧感に思わず悲鳴を上げる射命丸だ。

「このようなくだらないことで国を滅ぼすきか！」

「も、申し訳ありません。ああ、もう着きました。あそこです」

ミタマの眼前には真っ赤に燃える都と上空で暴れる二人の天狗とそれをどうするか辺りでうろうろしている天狗達であった。

「このままいけば半分以上持って行かれるぞ！消火活動は！」

「あの、火には妖気が含まれており、消すのが困難で」

ミタマ自身わかっている物の聞かずにおれなかった。しかし、ここで、何やら視線を感じ、そして、

「八雲紫！見ているのだろう、高みの見物なんぞしているんじゃない！魂ごと滅ぼすぞ！」

そう何も無い所に向かって叫んだ。

「魂を滅ぼすのは勘弁して欲しいですわ」

その空間に裂け目ができ、そこから、八雲紫が姿を現す。

「面白い情報を一つくれてやる。消化を手伝え」

「先に教えて下さいまし」

紫はいつでも逃げれるように裂け目から身を乗り出しつつ言う。それにミタマは舌打ちしたい気持ちを抑えつつ、言った方が早いと判断しいうことに決めた。

「……月に妖怪は勿論人までも、いや、この土地すら穢れていると言う存在がいる。更に神気に気付かず、兄様までも穢れていると言う程の奴らがな」

「へえー、そうなの」

紫もその手に持っていた扇子を強く握っている。人間にとって太陽が特別神聖な存在であるように、妖怪にとって月とは神聖な存在なのである。勿論彼らは自分達が人間からどのような存在と認識されているかは理解しているし、妖怪にとってそれが必要なのである。それに妖怪にとって土地はある意味人間以上に大事にしなければならないものである。それをまったく関係ない者がそのようなことを言っているなど、紫にとって我慢ならないことなのだろう。

「全く、度し難い者が居るのですね。いいでしょう。この情報に見合った働きをしましょう」

「頼むぞ。この子も手伝わしていい」

そう言って射命丸を押し出す。

「ちょ、ちょっと待って下さいよ」

しかし、ミタマはこれを無視し、上へ上がっていく。途中で思い出したかのように振り返り、

「八雲、月に攻めるのならば気をつけろ、奴らの道具は中々だぞ。弱いのなら致死は確実だ」

「……ええ、気をつけますわ」

紫はミタマの姿が上に上がりきったのを確認して裂け目から身を乗り出す。

「さてと、あなたの名前は何なの」

「あの、射命丸と申します」

「別に畏まらなくていいわよ。あれみたいに神なわけでもないし」

しかし、射命丸は本能的に紫に秘められた力の大きさを感じているのだ。

「それに、あなただって強いじゃない」

そうなのである、射命丸もまた、太郎坊の中の天狗たちのでは強い部類であり、ミタマと戦ってからは更に鍛錬していたのだ。いつか八雲紫という者と会っても恥をかかないようにと、尤もこんな所

で会うとは思わなかっただろうが

「さてと、やるわよ。射命丸」

＊

日は昇り人間の時間となる。ミタマは自分の神社に戻ってきていた。

「消化し切れんかったか」

「だって、しょうがないじゃない。途中から人間たちがわんさか出てきたんだもの。見つかったら面倒じゃない」

「まあ、良い。あのままいけば全焼は無いだろうからな。しかし、何故射命丸が此処に居る？」

「ついていくことにしたんです。妖怪の土地を作っているそうです」

「ええ、そうよ。妖怪による妖怪のための土地。名前はまだ決めてないけど。色々集まっているわよ。強いのだと鬼とかね」

「好きにやるといいさ。ま、人を虐め過ぎない限りな」

そう言って茶を啜り、さっさと出て行けと言うとしたが廊下を走ってくる音に気づき、ため息をついた。

「八雲紫、来ていたのか！よし、勝負しよう」

「ふふふ、いいわよ。また私の勝ちでしょうけどね。これ何勝目かしら」

「私のほうが接近戦では多いけどね」

木実はそう言って勝ち誇ったように笑いながら外へ出ていった。紫はそれに対し、顔を少し歪ませ追いかけるように外へ出ていった。

「あの、あの二人は大丈夫なのですか」

「大丈夫だろう。顔を合わせるといつもこうだ」

そう言って、ため息をつく。そして、茶が切れたことに気づき、人を呼ぼうとした。

これよりミタマが平穏な日々を得るのはまた先になるようである。何故なら、太郎坊を筆頭とする天狗たちが相談に来たりするようになったからだ。尤も木実は力比べをする相手が増えたから喜んでいるようなのだが。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1014z/

東方操魂道

2012年1月9日23時54分発行